One Aspect of Kosei-Nikki (Ogai)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5207

「航西日記」の性格

上田正行

近年、幕末から明治にかけてさまざまな使命と目的を帯びて欧米の先進諸国に派遣された高官・随員、あるいは留学生等の日記・紀行の類が改めて注目を集めている。それらの内の代表的なものは『遣外使節日記纂輯』全三巻（昭4～5　日本史籍協会叢書　昭46覆刻）や『万延元年遣米使節史料集成』全七巻（昭36・4　風間書房）、『西洋見聞集』（「日本思想大系66」　昭49・12　岩波）等に収められており、又、福沢諭吉、渋沢栄一、成島柳北等の渡航日記の類も、全集、その他で容易に目にすることができる。これらの日記・記録が注目されてきたのは言うまでもなく歴史的史料としてである。開国、文明開化へと進む我が国の近代国家成立期に於ける貴重な海外見聞記・報告書であってみれば、その史料的価値は言うまでもないが、近年、これらの史料が再評価されているのは、近代日本の出発期を見直そうとする時代の気運や、国際化（異質文明との出会い）が叫ばれている時代背景とも無縁ではなかろう。しかし、それだけでこれらの史料が注目を浴びているわけではない。今一つの側面としてそれらの史料が持つ文学性・表現（文体）の面がにわかに注目されてきたのである。(1)

言うまでもなくこれらの記録は殆どが漢文訓読スタイルで書かれ、中には日々の叙述に交じって漢詩が書き留められているものもある。一口に言えばこれらの記録の背景には江戸時代から武士階級に脈々と流れ続けている漢文脈の伝統がある。今、この漢文脈の表現が新たに見直されているのである。江戸時代に於いては〈上の文学〉として文学の一方の柱であったものが、近代文学の出発にあたっては完全にその存在を無視され、逆に口語文体確立において逆

に作用したと見るのが一般ではなかろうか。又、漢文脈の伝統はある面では（特に文語文体）活かされ、鷗外のような作家は文体的に多くのものを継承したが、それがある特定の作家に限定されて充分な裾野の広がりを見なかったというのが、文学史の常識であろう。しかし、近代文学史はこの漢文脈の伝統をあまりにも無視してきた。幕末から明治中期あたりまでの表現を考えた場合、中心はやはり漢文脈であり、これを抜きにしては近代文学は語れない。又、当然のことながら明治文学を担った大半の人達の幼少期の教養の中心が漢文脈であったという事実も看過できない。今、幕末、明治初期の漢文脈が新たに見直されるのは歪んだ近代文学史是正として当然のことであり、明治文学、近代の文体を考え直す上でその意義は大きい。

このように渡航史料を表現面から捉え直すと時代的に面白い共通性のあることが分かる。個々、別々の表現でありながら、そこには思わぬ表現の類似、スタイルの共通性が浮かび上がってくるのである。嘱目の景を捉え叙述する時の癖、対象に対する感懐、詩の詠みぶり等々、どれ一つを取っても一つの型のようなものが感得される。これは何も漢詩、漢文脈に限ったことではないかも知れない。花鳥諷詠の和歌、雪月花の俳句にも一つの型はあるはずである。型なくしてこれらの詩型はありえない。つまり、自然、人事に対した場合、我々日本人がとる一つの制度化された型のようなものが、それらの詩型の中にあるのである。漢文脈ゆえの型というものを我々は想定せざるを得ない。

これから鷗外の「航西日記」について論じようとするのであるが、これは明治十七年八月二十三日に東京を発ち、十月十一日、ベルリンに到着するまでの僅か五十日足らずの日記にすぎないが、この日記に、先行者である久米邦武『米欧回覧実記』と成島柳北『航西日乗』の影を指摘したのは小島憲之氏である。(2) 私も今回、「航西日記」と比較対照させながら両書を読んでみてその感を深くした。鷗外は先行の二書から実に多くのものを学んでいる。この場合、そのことが何を意味するかということが大きな問題となるのである。小島氏は「剽窃か本歌取りか」と、やゝセンセーショナルな形でこの問題を論じられたが、私はもう少し別な見方があるように思えるのである。同時代者として、又、

同じ海外渡航者という観点で捉えれば、もう少し別の意味づけも可能なのではなかろうか。

一　『米欧回覧実記』『航西日乗』との類似と対応

「米欧回覧実記」の方は現在、岩波文庫に入り容易く手にすることができる。五冊本の巻末にはそれぞれ田中彰氏による適切な解説が付されて、読者の便宜を図ってくれている。それによれば岩倉使節団は明治四年十一月十二日(陽暦四年十二月二十三日)に横浜を発ち、予定を大幅に超過して六年九月十三日に帰国している。その報告書である「実記」(略記)が刊行されるのは明治十一年十二月である(奥付には十一年十月刊行とあり五編五冊が同時に刊行された)。現在、東大の鷗外文庫には同じ奥付のある五編五冊のうち、はじめの三編三冊が架蔵されている。鷗外が西回りでマルセーユまで行く部分に対応するのは五編の第五冊である。米国を経由してヨーロッパに渡った岩倉一行のコースを逆に辿るわけである。時は明治六年七月二十日(マルセーユ発)から九月十三日(横浜着)までで、季節的にも大体合う。残念ながら、この五冊目は紛失しているので、どのような書き込みや傍線、圏点が施されていたかは不明である。あるいは鷗外はこの五冊目を手にしてヨーロッパの旅に上ったのであろうか。そして、マルセーユまで寄港地を同じくしたこの先輩の見聞記を参考にしながら、「航西日記」を綴ったのであろうか。

もう一人の先人成島柳北の方は東本願寺法嗣現如上人(大谷光瑩のこと)に随行して、明治五年九月十三日横浜を発ち、欧米を巡覧して翌六年七月二十三日に帰国している。東本願寺との関係は柳北が現如上人の知遇を得て、当時、浅草本願寺内にあった真宗東派学塾の塾長を勤めていたためであり、洋行中の任務は会計、渉外係であったが、かつて外国奉行を勤めたその識見と語学力も買われたためであろう。東本願寺が海外視察に出かけたのは、言うまでもなく明治新政府になって信教の自由が叫ばれ(明6・2・24、キリスト教禁制の高札撤廃)、教団として新しい事態に対

応する必要に迫られたためである。教団近代化のため欧州諸国の宗教事情視察が不可欠の前提であったのである。この時、柳北の外に随行員として本願寺から石川舜台、松本白華、関信三の三人が派遣された。舜台と白華は共に石川県の金沢市と松任市の出身であり、特に舜台は宗門の近代化に貢献した傑僧として知られ、育英学校を開設し近代真宗学の先駆者清沢満之を世に送り出している。今一人の白華は松任市本誓寺の出であり、この時の体験を「航海日記」（書名がないので「航海録」とも）として記録しており、貴重である。原本は今も本誓寺に保管されてあるが、内容は「真宗史料集成」十一巻（昭50・7　同朋会）に収められている。ここで注目すべきは白華が二種類の日記をつけていることである。一種は五年九月十一日から十月二十二日（波爾都最屠着まで）までで漢文体である。今一つは出発の九月十三日から単独で帰国の途にある六年六月十三日（地中海）までで、漢文体の本文に書き下しの頭注が加わる。この二種のうち後者はたしかに白華の見聞記ではあるが前者は違う。即ち、九月十三日（漢詩）より十月二十三日までの個所を柳北の「航西日乗」と対照させて読むと、その漢詩はもとより叙述に至るまで「航西日乗」の引き写しと思われる。細部に微妙な異同があり（例えば、漢詩の作られた日のズレ、「航西日乗」に載せられていない漢詩の存在等）[3]、柳北の現「航西日乗」の原本とは断定できないが、極めてこれに近いものではないかと思われる。現「航西日乗」は「花月新誌」掲載の書き下し文であるため、原文がいかなるものであったか全く想定できなかったが、この白華の「航海日記」の存在によって、僅か四十日足らずではあるが、その原文を想定することが可能となった。白華のそれが原文に近いとすれば、現「航西日乗」と対照して最も顕著な特徴は、その叙述が現「航西日乗」では日まし に詳細になるのに対して、漢文体のそれは簡潔な叙述で一貫していることである。このことから、「花月新誌」掲載に当たって柳北がかなり原文に手を加えたことが分かるのである。先に指摘した漢詩の位置のズレなども、やはり表現効果を考えてのことであろう。

厳密な校訂、検討は今後の課題としたいが、白華がなぜこのようなことを行ったかは、第二種日記の五年九月十九

日の条に「成島生示二昨夜詩一云」として柳北の詩が記されていることから、大よその見当がつく。当時の渡航者の常として日記をつけることが一般化しており、旅の徒然にそれらを見せ合うというようなこともあったのであろう。柳北の日記を一読して白華はその才の並々でないことを見抜いたのであろう。当時、「柳橋新誌」は未だ公刊されておらず、文人柳北の名がどれほど白華に認識されていたかは不明であるが、塾長としての風聞や、かつて外国奉行であった経歴については、ある程度、聞き知っていたであろう。その柳北の日記を一読してそれを筆録しておく価値を認めたのであろう。一種日記九月二十八日の条に「騰(ママ)写日誌」と見えるのはこのことを指すのであろう。

さて、問題の「航西日乗」の方であるが、五年九月十三日の出発より始まり六年六月一日のニューヨーク着で日記は終っているが(横浜までの二十二日分は散逸)、鷗外との対応で言えばマルセーユ発の十月三十日までが重要である。が、鷗外もパリに寄っているのでパリの条(六年一月六日[4]あたりまで)も見逃せない。鷗外がこれを目にするのは言うまでもなく「花月新誌」(明一四・一一の一一八号から一七・八の一五三号まで)に於てであり、鷗外が「花月新誌」の愛読者であったことは「キタ・セクスアリス」や「雁」でよく知られている[5]。このように見てくると鷗外が「米欧回覧実記」と「航西日乗」を目にしていたことは動かない。そして想像をたくましくすれば、航西の日の箧底に「実記」の第五編と「花月新誌」掲載分の「航西日乗」の仮綴じ本(切り抜き)がしまわれていたとも考えられる。あるいは、それが単なる想像にすぎないとした場合でも、鷗外が「航西日記」を浄書するに当たって手元にこの二本を備えていたことだけは明白である。それは内容の明確な類似・対応から言えるのであるが、この日記が掲載された「衛生新誌」第二号から第十一号までが鷗外帰朝後の、明治二十二年四月から十二月にかけて刊行されたという事実において、より決定的である。つまり、メモ風に書かれた日記を両書を参看しながら充分、推敲できる時間があったのである。

以上の前提に立って、今、明確に対応していると思われる箇所を煩をいとわずに列挙してみたい。まず「航西日記」

（「日記」と略記）を上げ、次に「米欧回覧実記」（「実記」）、「航西日乗」（「日乗」）の順で掲げる。意味づけは後で行なう。

1（日記）明治十七年八月二十三日。午後六時汽車発東京。抵横浜。投於林家。此行受命在六月十七日。赴徳国修衛生学兼詢陸軍医事也。

（日乗）（明五）九月十二日甲午月曜（即西暦十月十四日也）晴午前東京ヲ発ス（略）横浜ニ抵リ橘屋磯兵衛ノ家ニ投ジ旅装ヲ理ス

（冒頭）本願寺東派ノ法嗣現如上人将ニ印度ニ航シ転ジテ欧洲ニ赴キ彼ノ教会ヲ巡覧セバヤト思ヒ立タレ余ニ同行セヨト語ラレシハ壬申ノ八月中旬ニテ有リキ

2（日記）8/25 風波大起。困臥。

（日乗）9/17 風雨俄ニ起リ船身掀颺シ余モ亦起ツ能ハズ房中ニ困臥スルノミ

3（日記）8/27 遠山髣髴耐凝眸。呼起同行上舶樓。波際忽埋青一髪。自斯不復見蜻洲。

（日乗）9/16 回レ頭故国在二何辺一。休レ唱頼翁天草篇。一髪青山看不レ見。半輪明月大レ於レ船。

4（日記）8/30 過厦門港口。有二島並立。詢其名云兄弟島。有感賦詩日。一去家山隔大瀛。厦門港口転傷情。独憐双島波間立。枉被舟人呼弟兄。

（日乗）9/19 右ニ遠ク厦門ヲ望ム

唯看漁舟数葉翻。茫々無レ際碧乾坤。按レ図海容呼レ吾語。一抹雲山是厦門。

晩ニ二島ノ船右ニ立ツヲ認ム人ニ問ヘバ曰ク是レ兄弟島ナリト

5（日記）8/31 有奴引索揺双扇。自吾頭上送涼来。（七絶の転・結句）凡西舶食堂。当卓之処。弔下二麻簾。包以白布。毎簾繋索。使奴引之。一緊一弛。則麻簾揺動。如揮扇然。詩中所謂双扇即是。

（日乗）9/22 炎熱甚シキヲ以テ厨奴代ルル々縄ヲ引キ風扇ヲ舞ハシテ席ヲ扇グ快言フ可ラズ(7)

6（日記）9/1 家皆石造。皎潔若雪。石香港山中所産云。

（実記）明六8/27 山谷ニ「グラネット」石〈御蔭石ノ類〉ヲ出ス、英人是ヲ採リテ、石家ヲ築ク、皎白ニシテ潔美ナリ

7（日記）9/1 帰宿舟。恐盗也。蓋香港之名。原出葡語。盗賊之義。清人塡以今字。王紫詮(8)曰。山上多泉。甘洌異常。香港之名或以是歟。紫詮不識葡語。故有此説。

（実記）8/27「ホンコン」トハ、葡萄牙ノ語ニテ、海賊ノ謂ナリ、支那人遂ニ塡スルニ、香港ノ字ヲ以テス、腐木霊菌ヲ蒸シ出セリト謂フヘシ(9)

（日乗）9/20 香港盗賊多キヲ懼レ皆本船ニ還リテ寐ヌ

9/22 香港ニ泊スル両夕地ニ盗児多シト聞キ客館ニ投宿セズ

8（日記）9/2 出歩市街。見坊門招牌。皆筆法斌媚。(10)

（実記）8/27 記号、招牌（かんばん）、柱聯、漢文字ニテ筆法遒美ナリ、我邦ニ伝フル、清人ノ書態ハ、ミナ坊間ノ俗書ニテ、所

謂ル看板筆工ノ字ナリ、書家ノ筆跡ハ、反テ奇倔瑰偉ニシテ、姿媚ナラス

9（日記）9/5 海上無所見。（香港・安南間）

（実記）8/26 海上ミル所ナシ（安南・香港間）

10（日記）9/6 安南即交趾。其俗両足大趾。交曲相向。故取名。説出安南紀遊[11]。

（実記）8/23 此国ノ起源ヲ案スルニ、尚書堯典、羲叔ニ命シテ、南ニ度セシメシハ、南交ノ地ニテ、即チ交趾ナリトイヘトモ、深ク徴スルニ足ラス、然レトモ交趾ノ名ハ、此故事ニヨリテ与ヘラレタルナリ

11（日記）9/7 溯塞棍河。両岸皆平沢。草木蓊然。点綴村舎。風景如画。間見椰樹蘇鉄樹甚大。

（実記）8/22 柴棍河ヲ遡リ、（略）柴棍河ハ（略）両岸ノ地ミナ平沢ニテ、（略）沢中ニ大木ナシ、大抵叢樹灌木ニテ、灌符ノ中ニ錯出シ、蒙葱タリ

（日乗）9/25 亭午港口ニ入ル両岸緑樹幽草風景画ノ如シ処々ニ蘇鉄ノ大樹有リ

12（日記）9/7 寂寞漁村断復連。夾舟深緑鎖軽烟。喜他一陣椰林雨。乍送微涼到客船。

（日乗）9/25 針路縈回入二港門一。長流一帯不レ知レ源。夾レ舟雲樹奇レ於レ画。誘二得征人一到二塞昆一。

13（日記）9/7 屋瓦皆赤。

9/8 街上土色殷赤。

（実記）8/22 瓦ヲ葺ク、赤瓦ナレトモ、葺キ法ハ我邦ニ同シク、……

（日乗）9/25 屋舎ノ甍瓦皆赤色ナリ

9/26 街衢ノ土質ハ赤色ニシテ瓦ノ如シ

14（日記）9/8 両辺種樹似槐。所謂尼洎爾弗樹也。有牽牛花及芭蕉。(12)

（日乗）9/26 街上ニ栽ル所ハ大半槐樹ナリ人家ノ簷頭籬下一般ニ牽牛花ヲ植テ花露滴々タリ芭蕉ハ皆実ヲ結ビ累々トシテ園ニ満ツ。

15（日記）9/8 民家甚矮小。覆屋編扉。皆用椰葉。

（実記）8/22 河岸ノ小戸ハ、茅舎矮宇、或ハ椰葉ヲ編ミテ、宇壁戸牖トス

16（日記）9/8 室内多土床。與豕鴨同居。

（実記）8/22 屋内ハ多ク土床ニテ、（略）陸上ノ小屋ハ、前後ノ園庭蕪穢ニテ、家鴨（あひる）家猪（ぶた）ノ園ト相接シ（略）

17（日記）9/8 土人皆嗜山子。一枚切為四片。以蔓葉石灰并嚼之。不復須劉穆之之金柈。(13) 故男女歯牙皆黒。山子者檳榔実也。

（実記）8/22 小民ハ、男女共ニ檳榔葉ヲ嚙ミテ、歯ノ漆黒ナルコト、鉄漿水（かねみず）ヲ塗タルヲ疑フ

（日乗）9/25 男女其歯皆黒シ椰子ヲ食フニ因ルカ(14)

18 （日記）9/8 暮天雨霽人忘熱。如覚舟中一枕安。夜半房奴吹燭滅。虫声唧唧迫窓寒。原聞地多蚊蚋。今殊不然。
（日乗）9/25 夜舟中ニ眠ルニ両岸ノ虫声啾々トシテ耳ニ盈チ流螢乱飛スルヲ見ル其ノ形頗ル大ナリ蚊螨亦多シ(15)

19 （日記）9/11 過麻陸岬蘇門答臘之間。山脈断続。蜿蜒南北。
（日乗）9/29 南辺麻陸北蘇門。地勢蜿蜒両蟒奔。（七絶の起・承）

20 （日記）9/11 波平如席。
（日乗）9/23 浪静行舟平レ似レ席（七絶の転）
10/10 風微ニ浪平ナル席ノ如シ

21 （日記）9/11 （星嘉坡）有児童乗舟来。請投銀銭於水中。没而拾之。百不失一。舟狭而小。如刳瓜。嶺南雑記云(16)。蛋戸入水不没。毎為客泅取遺物。亦此類。
（実記）8/1 （亜丁）幼童ハ、普木ノ小艇、僅ニ二三人ヲイル、ヘキモノヲ浮メ来リ、客ヲシテ銀銭ヲ海水ニ投セシメ、皆水底ニ潜游シテ之ヲ拾フ、十ニ一モ失フコトナシ、銅幣ハ看認メ難シトテ拾ハス、泊舟ノ間、常ニ海中ニアリテ、客ニ挑求ス、蛙ノ水ニアルカ如シ
（日乗）9/29 港内ノ児童皆裸体ニテ瓜片様ノ小舟ニ乗リ来タッテ文具ノ類ヲ売ル客小銀銭ヲ水中ニ投ズレバ跳テ水ニ没シ之ヲ攫シテ浮ブ蛙児ト也似タリ(17)

22 （日記）9/11 街上土色之赤。与塞棍同。

（日乗）10/1　地質ハ皆赭色ナリ

23
（日記）9/11　土人渾身黧黒。肩腰纏紅白布。女鼻穿金環。皆跣足。奉回教者。戴帽若桶。
（日乗）9/29　土人皆黒面跣足ニシテ紅花布ヲ纏ヒ半身ヲ露ハス画図ノ羅漢ニ同シ其中少シク財産有ル者ノ如キハ背回教ノ徒ト見エ桶様ノ帽ヲ戴ケリ女子袒シテ跣ス鼻ヲ穿ツテ金環ヲ垂レシ者アリ奇怪極マレリ

24
（日記）9/11　港口島嶼星羅。
（実記）8/18　島嶼大小星羅シ

25
（日記）9/11　蓋此地麻陸一島。英人開港以扼支那印度両海之咽喉。
（実記）8/17　英人ハ已ニ「カルカタ」ヲ以テ外京トナシ、新嘉坡ヲ開キテ、東南洋ノ口ヲ扼ス
8/18　印度海、支那海、往来ノ咽吭タリ

26
（日記）9/11　児童幾個膚如漆。蛮語啾々売彩禽。（七絶転・結）
（日乗）10/1　幾個蛮奴聚二港頭一。排二陳土産一語啾々。（七絶起・承）

27
（日記）9/18　（歌倫暴）激浪触堤。竪立十丈。白沫乱飛。洶動心驚魄之観也。（略）土人睋目隆準。服装与新港同。
（日乗）10/1（ポイントデガウル）港ノ左ニ灯台有リ台下水石相激シ噴散雪ノ如シ土人ハ眼鋭ク鼻高ク印度人種中ニテ最上等ニ位ス衣服ハ新嘉坡ト一様ナリ(18)

28 (日記) 9/18 三版刳木造之。形狭而小。扁舷縛両木。彎曲如弓。其端挂以浮槎。令無傾欹。二人行之。

(実記) 8/9 (ポイント、デ、ゴール)船已ニ錨ヲ投スレハ、土民小艇ヲ打テ蟻附ス、此辺ノ土民ハ一種ノ船ヲ造ル、巨材ヲ刳シテ舟トナス、其幅僅ニ人身ヲイル、ニ足ル、長サ二丈余、深サ腰ニ及フヘシ、舟ノ両側ニ茵(しとね)ヲオキ客ニ踞セシム、舟形ハ如此ク狭長ナレハ、水中ニ浮ムニ傾仄シ安カラス、故ニ舟椽ヨリ、二ノ弓材ヲ横ニ縛リ出シ、是ニ浮槎ヲ綑縛シテ平均ヲトリ、危キニ似テ甚タ穏ナリ、両人ニテ楫ヲ以テ舟ヲ推ス

(日乗) 10/7 港口風浪平カナラヌ故奇ナル小舸ヲ造リ客ヲ載ス其ノ製舟ノ一傍ニ木板ヲ附ケ軽重ノ権衡ヲ取リ覆没ヲ防グ舟ノ体ハ横甚ダ狭クシテ尺余ニ過ギズ長サハ二丈許ナリ[19]

29 (日記) 9/18 有牧牛場。見牛数十頭。起臥千緑草之上。(略)呉子所謂可蔽満谷之牛羊者即此。

(実記) 8/9 時ニ乾田アルハ、中ニ牛ヲ飼フヲミル、其牧法ハ、地ニ杙ウチ、牛ヲ繋キテ、田中ノ草ヲ食セシム、(略)欧州満野ニ牛ヲ放ツテ牧セルハ、[20]ミナ柔和ニテ、……

30 (日記) 9/18 入一仏寺。有釈迦涅槃像。陶盤供華。香気溢堂。僧貌如阿羅漢像。挂黄袈裟。穿革鞋。

(実記) 8/9 僧ハミナ眉髪、及ヒ髯ヲ剃リ、黄色ノ棉布ヲ以テ、右肩ヨリ左腋ニ結フ、即チ七条ノ袈裟ナリ、(略)其内一人ノ老僧、其風貌宛然トシテ、羅漢ニ似タルモノ(是ニテ羅漢ノ像モ、此島ノ人種ヲ写シタル骨相ナルコトヲ知ラレタリ)、我輩ヲ延テ、(略)「ボーカハバット」ハ、是ヨリ較北ナル岡上ニアリ(略)此内ニ釈迦涅槃ノ巨像アリ

(日乗) 10/7 門ニ入リテ中堂ニ進ム堂ニ釈尊ノ臥像ヲ安ズ其ノ巨大驚ク可シ而シテ陶製ナリ

31 （日記）9/18 寺蔵貝多経。字用巫来由体。此地釈迦隆興之所。方言中猶有檀那伽藍等之語云。

（実記）8/9 一人ノ老僧、其風貌宛然トシテ、羅漢ニ似タルモノ、我輩ヲ延テ、一室ニ往キ、貝多羅葉ニ写シタル、経簡ヲ示ス、其上品ナルハ漆ヲ以テ金文字ヲ写ス、下品ナルハ鉄筆ニテ写ス、其文字ハ、土耳其文字ノ更ニ彎曲セル如キ状ニテ、梵字ニ非ス、蓋シ巫来由（マレイ）の文字ナリト云、（略）日本人ヲ「ダンナ」ト云、堂ヲ「ガラン」ト云、ミナ梵語ノ来源、今ニ訛ラサルヲ感セリ、錫蘭島ハ、釈迦修道ノ霊蹟ニテ、土人今ニ至ルマテ、ミナ仏教ヲ信向ス

32 （日記）9/18 鳩啼林外雨淋鈴。(a)為扣禅扉車暫停。挂錫有僧引吾去。(b)幾函畳葉認遺経。（略）風物何辺似箇幽。(c)紅花緑葉四時稠。遍舟解去多遺恨。辜負(d)清光月国秋。蓋印度者月国之義。説出西域記。(21)

（日乗）10/7 古廟蕭條老蘚青。(a)時看遠客敲二幽扃一。椰林深処山僧在。(b)猶写当年貝葉経（略）三千年古刹。(b)一万巻遺経。試問二往時事一。(d)山風吹レ月青。

将ニ去ラントス老僧別レヲ惜ンデ悵然タリ又馬車ニ乗リ市街ニ出ツ(c)此港ハ草花多ク其色殊ニ艶ナリ本邦秋草ノ七種ハ遠ク及バザルニ似タリ

33 （日記）9/24 晩望速哥多喇島。山骨崟岈。作鋸歯状。

（実記）8/1 （亜丁）海岸ノ東ニ山岬アリ、岩石鋸ノ如シ

34 （日記）9/26 （亜丁）港英人所開。紅海之咽喉也。西南面海。赭山繞焉。四時少雨。満目赤野。不見寸緑。土人褐色。頭髪黄枯。鼻穿金環。衣掩半身。操亜剌伯音。雑以英語。所奉皆回教也。土人来売貨物。駝鳥羽最美。聞此地有貯水池。以貯天水。速爾門王所創。欲往観而不果。

（実記）8/1 亜丁ハ、也門（イエメン）部ノ良港ニテ、紅海往来ノ咽喉ニアリ[22]……海湾西南ニ向ヒテ開ケ（略）。土人ハ……亜剌伯語ヲ操ル、亦英語ヲ解スルモノアリ……其衣ハ大抵半身ヲ裸ニシテ、腰ニ長幅ノ棉布ヲ巻ク……頭髪ハ散髪多シ、黄土ノ如キモノヲ塗リ、或ハ之ヲ染メタルモノアリ……鼻孔ノ右ヲ穿チテ、之ニ金環ヲ穿チタルモノ多シ（略）。

貧民集リ来リ、物ヲ売リ銭ヲ貰フ、蟻附蠅散シテ厭フヘシ、駝鳥ノ羽ト毛トヲ売ル（略）。紅海ノ周囲ハ、鑠金ノ酷熱ニ、終年ヲ度リ、地ノ枯燥スルハ、極目ミナ赭山赤野[23]ニテ、年ニ数回ノ驟雨アルノミ（略）。

此地ノ壮観ハ、溜水池ナリ、紀元前ニアタリ、此地ノ王「キンク、オフ、ソルモン」ナル人、此辺ノ山勢ヲ按シテ、此渓壑（けいがく）ハ、雨溜ヲ蓄フヘキ地勢ナルヲミテ、岩洞ニ石灰ヲ鞏固シ、池ヲ造リテ、其水ヲ受ケシメタリ

（日乗）10/15 亜剌比亜ノ海岸ハ概ネ砂礫ノミニテ青草ヲ見ズ（略）。

土人舟ニ来タリ豹皮及ビ駝鳥ノ毛羽ヲ鬻グ……山上ニ古来ノ大沼有リ以テ雨水ヲ貯ヘ飲料ニ充ツ此沼ハ羅馬人ノ造ル所ニシテ英人之補理スト云フ（略）

10/20（スエズ）両岸赤地[24]渺茫トシテ寸草ヲ見ズ

35（日記）9/26 童山赤野無青草（七絶・転）

（実記）7/28（紅海）童然タル死山ナリ

8/1 沙漠赤野多シ（略）　極目ミナ赭山赤野ニテ

（日乗）10/15 四望難レ看寸草青。山容洞態[25]赭而獰。

36（日記）10/1 埃王鵡礼所鑿開。而督工者為仏国学士列色弗氏。其成功在十五年前云。

（実記）7/27「ポルトサイド」ヨリ蘇士マテ、百英里ノ地峡ヲ、郵船ニテ駛行スルヲ得ルハ、僅ニ四年前ヨリノコトニテ、是ハ仏国ノ学士「レツセフス」氏ニ向ヒテ、謝スヘキナリ（略）

「アリー」王殂シ、事遂ニ中止シタリ、当王「イスメール」王ハ、初メ仏朗西ニ遊学ヲナシタル人ニテ、即位ノ後ハ、仏国ヨリ政事顧問ノタメ、大学士数人ヲ聘シタリ、「レツセフス」氏ハ其一人ニテ、埃及国ニ赴キ、王ノ礼遇ヲウケタリ

37

（日記）10/1 濬河功就破天荒。地下応驚仏朗王。喜望峰前人不到。名虚十有五星霜。初拿破崙一世征埃及。欲開河道。不果。第二故及。

（実記）7/27 一千八百年ノ初メ、仏朗西帝拿破侖第一世、埃及ヲ伐従（うちしたが）ヘシトキ、此地峡ヲ開鑿シテ、河道ヲ通セント、地勢ヲ測量ナサシメシニ、其時ノ測量ニテハ、両海ノ水面ハ高低ノ差百「メートル」ニ及ヒ、[26] 開鑿スルモ其功ナカラントノコトナリキ

（日乗）10/20 閑却南洋喜望峰。（七絶の結句）

38

（日記）10/2 至午望綿（ママ）楂勒湖。見漁父挽罟。自蘇士至卜崽。有四湖。緜楂勒湖一也。午後二時。至卜崽港。則湖北之一沙嘴也。買舟上陸。街上多「尼洎爾弗」樹。土人牽驢勧乗。

（実記）7/26「ポールトサイト」……此地ハ「メンザレ」湖水ノ東北岸ニテ、海ト湖トヲ隔テタル、一帯ノ沙嘴上ニ位セリ

7/27 運河ノ口ハ「メンザレ」湖ヨリ入ル、此ハ四湖中ノ最大湖ナリ

7/26 土民驢馬（ドンキー）ヲ牽ヒ来リ、迫リ勧メテ騎セシム

（日乗）10/21・22（「テムザ」「イスマリア」「バラア」「メンザレ」の四湖の名が見える）[27]

10/22 路上一樹ノ「ニサルプ」ト名ヅクルヲ観ル葉ハ槐ニ類シテ刺アリ枝幹ハ柳ニ似タリ土人驢ヲ牽キ旅客ヲシテ乗ラシム

39 (日記) 10/2 水狭沙寛百里程。月明両岸草虫鳴。客身忽落繁華境。手挙巨觥聞艶声。

(日乗) 10/22 新浦頭開海色妍。南来北去万帆懸。千年砂磧無人地。築起楼台数百椽。

40 (日記) 10/5 (メッシナ海峡)晩過細々里海峡。……蒲帆両々又三々。一帯潮流隔紫嵐。多少楼台燈未点。暮烟深鎖墨西南。

(日乗) 10/25 夜ニ入リメシナヲ過グ雨気冥濛燈台ト人家ノ燭影トヲ認メ得ルノミ

江山咫尺水烟含。明滅篝燈一二三。涼雨凄風人不レ語。征帆夜過墨西南。

41 (日記) 10/6 哥塞牙者拿破崙一世所生之地。而洎第尼一島噶爾秬日之故宅。今過此境。不能無感。賦詩二首。曰。(略)

赫々兵威及米洲。平生戦闘捨私讐。自由一語堅於鉄。未必英雄多詭謀。

(実記) 7/20 「コルシカ」島ハ、……第一世拿破侖ハ此ニ生ル、(略)「サルヂニヤ」島ノ海浜ニ一島アリ、一宇ノ白堊屋ヲミル、是以国ノ民権家「ガルバルヂー」氏ノ住宅ナリ、「ガルバルヂー」氏ハ、嚮ニ以太利一統ノ乱ニ、民間ニ起リ、大勲業ヲ立タル、当世ノ偉人ナリ(略)

猶依然ト共和論ヲ主張シ、退テ此島ニ帰リ、欧洲ノ民権論ヲ維持シ、常ニ帝王ヲ廃シ、僧権ヲ廃スルヲ己ノ責任トナセリ、米国ノ南北相戦フトキ、「カルバルヂー」氏曰ク北部論正シト、往テ之ヲ助ク、米人群起シテ其隊下ニ従ヒ、大功ヲ建タリ、事綏(やすん)スルノ後ハ直ニ去テ此島ニ帰ル[28]

42 (日記) 10/7 贈仏人某曰。聞説多年官税関。殊郷憐汝改容顔。飄然又作全家客。手拉妻児向故山。
(日乗) 10/4 (印度洋) 和蘭ノ士人二歳瓜哇ニ滞留シ這回本国ニ帰ル者有リ為メニ賦ス
拉レ児拉レ婦太多情。試問移レ家何処行。印度三秋干役畢。今年帰向海牙城。

43 (日記) 10/7 回首故山雲路遙。四旬舟裏歎無聊。今宵馬塞港頭雨。洗尽征人愁緒饒。
(日乗) 10/28
望二馬耳塞港一作
四旬経過怒涛間。報道今宵入二海関一。雲際遙看燈万点。満船無二客不一レ開レ顔

44 (日記) 10/7 行人絡繹欲摩肩。照路瓦斯燈万千。驚見凄風冷雨夜。光華不減月明天。
(日乗) 10/28
夜歩二街上一口占
枕レ海楼台十万家。西来始是認二豪華一。気燈照レ路明レ於レ月。佳麗争馳幾輛車。[29]

45 (日記) 10/8 (火輪車でリヨンを過ぐ) 清輝凛々秋天月。影自塔尖遷樹梢。熱市冷村塵一瞥。無由詩句費推敲。
(日乗) 10/30 坐看万水又千山。数日行程転瞬間。何事往来如レ許急。火輪不レ似客身閑。

46 (日記) 10/9 (巴里) 夜観「夜電」部劇場。[30] 客五千人。設座四層。俳優有男有女。多伊太利人。所演之戯。名「宮中

愛」。凡四齣。曰名姝謁王。曰壮士決闘。曰英雄凱旋。曰夜宴簪花。女優扮名姝者。媚態横生。使人銷魂。別有一齣。名「騒擾夜」。戯謔百出。観者絶倒。場中器具。極其精緻。或借鏡影。或用彩光。若明月照林。噴水籠烟。殆不可弁其真仮也。

（日乗）（明六）1/6 晩来米田子来訪ス共ニ「ロテーオン」ノ劇場ヲ観ル場ノ荘麗驚ク可シ演ズル所ハ女子ノ怨恚シテ死シ厲鬼トナリシ物語ナリト云ヘド能ク言語ヲ解セネバ分明ニ記載シ難シ

以上が「航西日記」と「米欧回覧実記」「航西日乗」との主な対応箇所である。中には10のように交趾の地名起源説を異にしているので、ここは厳密な意味で対応していないと見るべきかも知れない。又、漢詩の場合、語句・詩句の類似・対応でない場合は、詩の持つ雰囲気を考えたが、これも個人により解釈が異るかも知れない。四十六箇所という数え方にも少々厳密さに欠けるところがあるかも知れない。

さて、これらの類似・対応箇所の意味づけであるが、二つのことが考えられるように思われる。一つは叙述のスタイル、文体について鷗外は二人の先輩から多くを学んでいるということである。特に語句、言いまわし、事物の形容において採るべきところは採っている。又、漢詩については「実記」には記されていないので、専ら文人柳北から多くを学んでいる。漢詩の力量についてはこの先輩に一目も二目も置いていたようである。「実記」の方は記録、報告ではあるがその文章には注目すべきものがある。田中彰氏も文庫本の解説で「文章自体、簡にして要をえ、歯切れよく格調も高い」「明治記録文学の傑作」と呼んでいるが、けだし至言であろう。漢文脈の持つ簡潔さ、正確さ、力強さが遺憾なく発揮されて、この種のものとしては最高度に文学性が活かされている。その意味で久米邦武と柳北の叙述スタイルと柳北の漢詩における表現技巧が「航西日記」に流れ込んでいると見るべきであろう。つまり文体的に二人に負う所が大きいように思われるのである。しかし、そのことを認めた上で、なお顕著な鷗外の文体上の特色は、二人

よりもはるかに文章が簡潔なことである。これは出発からベルリン到着まで変らない。「実記」はその性格上、止むを得ないが柳北も時には饒舌になり説明過多となる場合がある。又、二人には時々、「唯ダ土人狡猾無恥人ニ迫テ物ヲ売リ囂々蚊螞ノ如クナルハ極メテ厭フ可シ」（「日乗」明5・10・7　ゴール）とか「尤モ厭フヘキハ、『ゴール』近傍、村々ノ童幼、客ヲ認ムレハ、集テ銭ヲ貰ヒ、靦トシテ恥ナク、追ヘトモ亦来リ、遊観ヲ妨ケ、殆ト堪ヘカラス」（「実記」明6・8・9　ゴール）という具合に、自分の感情を露にしている箇所がいくつかあるが、鷗外にはこれがない。概して鷗外の方がより禁欲的な叙述で一貫している。そして、一見、淡々として起伏のないこのスタイルにこそ、より文学性が感じられるのである。「独逸日記」やドイツ三部作に至る抒情の質はこの「航西日記」で既に決定されているかの如くである。

次に今一つの注意すべきことは各寄港地で触れた風景、風俗（言語・容貌・服装等）、習慣、施設、建物、動・植物、あるいは海岸の地形や歴史上のエピソード等の類似である。これはすべて実景を基にして書かれる渡航記に共通するもので、描写が似通うのは無理のないことである。サイゴンの屋根の瓦は赤く、スエズ、紅海両岸が「満目赤野」であるというのは誰が見ても変らない事実であろう。「実記」と「航西日乗」にも似通う描写が多く、更に溯って渋沢栄一の「航西日記」[31]（慶応三年）を参看しても同様のことが言える。大体、同じ物を見、同じ描写をし、よく似た感懐を催しているのである。従って、以上の二つの特質から推して、「航西日記」を剽窃呼ばわりするのは穏当を欠くように思われる。これは小島氏も指摘するように先輩二人に敬意を表した本歌取りと見るべきであろう。漢詩、漢文、あるいは紀行文で取られた当時の一般的慣行の範囲を出ないであろう。このことは「航西日乗」を見た場合、柳北も「実記」を参看した節が充分に窺えるからである。そしてより強調したいのは、列挙した対応箇所は最後のパリ・オデオン座の部分を除いては、「航西日記」を考える場合、それほど重要な意味を持たない部分であるということである。「航西日記」の独創と鷗外の強烈なモチーフはこれら対応箇所には全く見当たらないのである。つまり、月並の風景描写

や叙述の箇所で鷗外は二人の先輩に敬意を表しているのである。

しかし、本歌取りを言いながら、そのことを「舞姫」の「セイゴン」の条と絡めて小島氏が論じられる時、少し疑問を感じざるを得ない。「舞姫」冒頭、「セイゴン」の一節は私もかねがね疑問に思っていた所であるが、今、あえて初出文を引用してみる。

五年前の事なりしが平生の望み足りて洋行の公命を蒙ふりこのセイゴンの港まで来し頃は目にみるもの耳に聞くもの一として新しからぬはなく筆に任せて書き記したる紀行は日ごとに幾千言をやなしけん当時の新聞に載せられて世の人にもてはやされしかど今日になりて思へば穉なき志操、身の程しらぬ放言、さらぬも世の常の動植、または民俗などをさへ珍らしげに細叙したるを心ある人は奈に見しやらん（「国民之友」第69号付録　明23・1）

ここでの問題は二つある。一つは「当時の新聞に載せられて世の人にもてはやされしかど」が事実か否かということであり、今一つはそれがフクションだとした場合、この条をいかに解釈するかということである。まず前者の方であるが、太田豊太郎が鷗外と重なると見た場合、新聞への寄稿が全くフィクションであるとは直ちに断定できない。近年、宗像和重氏が「投書家時代の森鷗外」（「文学」昭61・10、11）を発表され、明治十四、五年にかけて十編（存疑二）の投書文を「読売新聞」投書欄に発表していたことを突きとめられた。これで鷗外に投書家時代と呼ばれる一時期のあったことがはっきりしたわけであるが、その鷗外が始めて航西の途に上り、目にした「動植」「民俗」の類を故国の新聞に報告するということは可能性としては大いにあり得る。このところを、新聞以外の雑誌にも当たってきちんと調査された方があるのであろうか。残念ながら私の方も未だ充分に検索していない。「読売新聞」「郵便報知新聞」「東京日日新聞」三紙の明治十七年九月から十二月まで当たってみたが該当記事はなかった。十七年九月七日にサイゴンに到着し十月十一日のベルリン到着で日記が終わっているので、九月から十二月に限定して調査したが、あるいは十八、九年にドイツから送っていることも考えられる。当時、新聞が海外通信の類を載せていたことは、例えば

「郵便報知」の十七年九月に矢野文雄の「龍動通信」が何回か、又、十月には尾崎行雄の「特別通信」（のちの「遊清記」）が連載されていたことで分かる。従って、鷗外がその通信文を新聞に送ったとしてもさして不思議はないのである。このことから特に数年にわたる新聞の徹底的調査が必要と思われる。もしそれが見つかれば、この条の疑問は大方、氷解するはずである。

未だ調査を了えていない段階で、こういう仮定は不謹慎であるが、一歩譲って、もしこの条がフィクションであった場合どうなるか。小島氏は「当時の新聞に載せられて」を必ずしも「衛生新誌」（明22・4～12）に掲載されたことは取っていないが、次の「世の人にもてはやされしかど」を「衛生新誌」の長瀬時衡評と重ね、又、「心ある人は奈に見しやらん」を「航西日記」の読者（中の具眼の士）と取っているから、結果的には「衛生新誌」に掲載されたことのカモフラージュとなってしまう。鷗外は「航西日記」が公表され、慧眼の士に「実記」との類似を指摘されることを、それほど恐れていたのであろうか。たしかに内心、忸怩たるものが全くなかったとは言えないが、この小島氏の読みは余りにも鷗外のモチーフや裏の読みに力点を置くもので、作品の文脈からは少々、外れた解釈と言うべきであろう。

作品の文脈から言って豊太郎が最も内心、忸怩たる思いをしているのは自分の書き送った文の「穉なき志操」「身の程しらぬ放言」でなければならない。そして次に来るのが「動植」「民俗」のことどもある。ところが、もし、これを「航西日記」のことだとすれば、前者の「穉なき志操」「身の程しらぬ放言」は、これを指摘するのがきわめて困難になる。そして、次の「動植」「民俗」に至っては、確かに類似・対応の所でも見てきてその存在は確認できるが、特にそれが「珍らしげに細叙したる」と言えるかどうか。香港、サイゴンでは共に「花苑」（動物も飼ってある植物園）に入っているが記述はきわめて一般的である。「民俗」の方は幾分か珍らしさは伴ってはいるが、それは渡航記にしばしば見られる現象で驚く程のことではない。あるいは小島氏はそれらは凡てカモフラージュであって、つまるところ、

「動植」「民俗」の描写の類似を気にしていたと言うのであろうか。もし「航西日記」と重ねるならば私には九月七日の「此日報軍医本部。以香港観病院之事」が重要な意味を持つように思われる。衛生学を修め、陸軍医事を詢うことを主要目的として出発した鷗外は、早くも九月三日、香港で使命感に燃えた行動を取っている。即ち英軍の許可を得て停歇病院（軽い患者用の療養を主とするものか）と浮動病院[32]を見学してその様子を書きとめている。罹病者の数、病気の種類（熱症、花柳病の類）、設備等を書き記して最後に英人医師に脚気の有無を問い「甚稀」の答を得ている。しかし、新聞広告から香港在住者にも脚気を患う人の多いことを書きとめることを忘れていない。いずれにしても脚気対策がわが陸海軍にとって重要な課題であったことは言うまでもなく、翌年の五月「徳停府ニ負傷者運搬演習ヲ観ルノ記」で鷗外は緒方正規が脚気の「バチル、ス」を発見したという報を驚きを以て書き記している。これらから推して鷗外が香港で目にした英軍の病院の様子をかなり詳しく報告したであろうことは想像に難くない。残念ながらこの時の報告書は全集（二十八巻）に収められていないので想像の域を出ないが、病院の様子を述べながら、例えばその設備、あるいは英国軍人の罹っている花柳病、又は絶無に近い脚気等について鷗外はかなり感慨を込めて自説のようなものを開陳したのではなかろうか。又、後にも詳しく触れるが、長瀬時衡がいみじくも指摘したように、「航西日記」には「慷慨悲壮」の思い、「一種の風濤の気」が充満している。言うまでもなく植民地化されつつある東洋の現状を目のあたりにして、激しい危機意識を持ったことであろう。清仏戦況のことが記され、英人に付与された香港のことがうたわれている。ここから推しても陸軍への報告書に「一種の風濤の気」が漂っていておかしくないのである。豊太郎が最も内心忸怩としたものを鷗外その人と重ねた場合、その「穉なき志操」「身の程しらぬ放言」とは「航西日記」には具体的に書かれていない、これら報告書の類の内容に関することではなかったであろうか。そうであってはじめて「心ある人は奈に見しやらん」が落ち着くのである。ここはやはり「若気の至り」という感懐と取るのが最も適切なように思われる。そうすれば中心はやはり「穉なき志操」「身の程しらぬ放言」であり、「世の常の動植」「民俗」

などは二の次になってしまう。鷗外が真に恥じたのは「穉なき志操」「身の程しらぬ放言」であったであろう。「動植」「民俗」の「実記」との類似をそれ程、気に病んでいたとは思われない。

二　「航西日記」の独自性

既に見てきた通り、「航西日記」には「実記」や「航西日乗」と類似した箇所がいくつか見られたが、それは「舞姫」の表現を借りれば主に「動植」「民俗」に関するものが大半を占めた。そしてそれは、くり返しになるが、「航西日記」を考える場合、特に独自な意味を持つ箇所ではない。「航西日記」の真に独自的な所は、それ以外の箇所にいくつかあるのである。今、それをいくつか列挙して「航西日記」の独自性に迫りたい。

1　明17・8・23　漢詩

一笑名優質却孱　依然古態聳吟肩　観花僅覚真歓事　題塔誰誇最少年
唯識蘇生愧牛後　空教阿逖着鞭先　昂々未折雄飛志　夢駕長風万里船

2　同8・29　日東十客歌

泛峨艦兮渉長波　日東十客逸興多　田中快談撼山嶽　飯盛痛飲竭江河
穂也長也如処女　清癯将不勝軽羅　宮崎平生多沈思　與他片山是同科
隈川学操法国語　孜々唯惜日如梭　丹波何曽無豪気　毎遭風濤即消磨
底事老萩情未尽　滑喉唱出子夜歌　独有森生閑無事　鼾息若雷誰敢訶

他年欧洲遊已遍　帰来面目果如何

3

同8・30　過福建。望台湾。

(ア)青史千秋名姓存　鄭家功業豈須論　今朝遙指雲山影　何処当年鹿耳門

(イ)絶海艨艟奏凱還　果然一拳破冥頑　却憐多少天兵骨　埋在蛮烟瘴霧間

4

同9・3　香港で英軍の停歇病院と浮動病院を見学

5

同9・4　漢詩二首

(ア)開釁当年事悠々　滄桑之変喜還愁　誰図莽草荒烟地　附與英人泊万船

(イ)家書草罷意凄然　坐見層巒烟霧起　日落余光猶在波　扁舟来売芭蕉子

6

同9・6　過安南山下。

安南山下蘯舟過　顧望不堪応接多　回首遠征千古事　烟雲何処吊伏波

7

同9・11　蓋此地麻陸一島。英人開港以扼支那印度両海之咽喉。其盛固不待言也。(於シンガポール)

聞説蛮烟埋水郷　埔頭今見列千檣　英人応有点金術　塊鉄之頑乍放光

8 同9・13　閼珍の戦役に参加した林紀を偲ぶ

万里泛舟過蘇門　閼珍府城渺烟氛　憶曽林君奉明詔　奮身来従和蘭軍
由来為医道非易　知期愆期事紛々　況在兵馬倥偬際　措置従容建殊勲
林君生為名閥子　気象英邁自超群　西人手段看既透　条理井然胸裏存
帰来披図奏天子　弁論称旨官禄尊　自此屢閲辺陲変　君無遺策世所聞
我来慷慨遙決眦　水煙茫々罩夕曛　如今誰起紹雄志　当時医林猶有君

9 同10・1　（スエズ運河で）

濬河功就破天荒　地下応驚佛朗王　喜望峰前人不到　名虚十有五星霜

10 同10・2　ポートサイドで管弦合奏を聞く

水狭沙寛百里程　月明両岸草虫鳴　客身忽落繁華境　手挙巨觥聞艶声

11 同10・6

コルシカ島を臨んで

(ア)往事如雲不可追　英雄故里水之涯　他年席捲欧洲志　已在小園沈思時

サルジニア島を臨んで

(イ)赫々兵威及米洲　平生戦闘捨私讐　自由一語堅於鉄　未必英雄多詭謀

12　同10・7　マルセーユで

(ア)氷肌金髪紺青瞳　巾幗翻看心更雄　不怕萍飄蓬転険　月明歌舞在舟中

(イ)鵬翼同披海外雲　談兵未已又論文　奇縁何日曽相結　不是人間燕雀群

(ウ)行人絡繹欲摩肩　照路瓦斯燈万千　驚見凄風冷雨夜　光華不減月明天

13　同10・9　パリのオデオン座で観劇

見られる通り、詩に鷗外の独自の思想、感慨が多く盛り込まれていることは明らかである。これは言わば当然かもしれない。動植・民俗等の実景を写しても型通りのものになってしまい、いきおい独自の思想となれば多く感慨が盛り込める詩の形を取るのが一般であるからである。その意味で鷗外の「航西日記」は典型的な日本の和歌、俳句を中心とした紀行文の伝統を踏まえるものである。旅の途次、嘱目した景物を書き留めながら、時にはそれに触発され、又、ある時は他の要因から卒然と起こりくる感慨をうたうというあの方法である。これら、主に詩に込められた鷗外の感慨とは何であったのであろうか。

少し図式的にはなるが、十三箇所を類別すれば次のようになろうか。

(一)述志（留学の期待と決意）　1、2、12(イ)

(二)使命感　4、8

(三)主に東南アジアの現実と危機意識（愛国心）　3(ア)(イ)、5(ア)(イ)、6、7、8

(四)英雄への思い　3(ア)、6、9、11(ア)(イ)

(五)西洋への憧憬　10、12(ア)(ウ)、13

はじめの述志を見れば、これは当然のことであるが明治初期のエリートの上昇志向と国家有用の材たらんとする気概に満ちている。1は明治十四年七月、大学を卒業した時の感懐を賦したものであるが、海外留学の条件には遠く及ばない成績であった悔しさを述べながら、「雄飛の志」を持ち続けていることをうたったものである。2は同じ船に乗った十人の仲間をユーモラスにうたってはいるが、12(イ)同様、「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」の大気概、満々たる野心が充溢している。この野心、気概は時代を考えれば当然で、「日東十客」の凡てに共通していたものであろう。(二)の使命感も同様である。鷗外に衛生学を修め陸軍医事を詢うという明確な使命と目的があったように、他の友人にも国家より課されたそれぞれの使命があった。既に陸軍軍医本部に課僚として三年間勤めた鷗外は、この使命感にきわめて忠実であった。先に見てきたように香港で早速、その使命感を発揮し英兵屯舎を見学しようとして時間がなく、病院施設を見て回っている。そして軍医本部宛の報告書をサイゴンから投函している。[33] この鷗外の使命感が更にいや増すのはスマトラ島西北端、アチエを望見して亡き先輩林紀(つな)(明15・8　パリで客死、三十九歳)を偲んだ時である。林紀については小西謙、長谷川泉両氏の研究に詳しいが、[34] それによると林紀研海は鷗外が陸軍入りした時の軍医本部長であり西周ときわめて親しかった。即ち共にオランダに留学した仲であり西周の養子紳六郎は林紀の弟であった。ために鷗外の陸軍入りには、小池正直や石黒忠悳の尽力の外に林の力もあったことはその西周宛書簡でも知られる。従って、その林が鷗外が陸軍入りして僅か八カ月で客死したため、鷗外の驚きが如何ばかりであったかは想像に難くない。しかし、その驚きは個人的な情実からのみ来たのではない。逆にその部分は小さく、多くは林紀の大先輩としての力量、識見共に偉大なるのを亡くした悲しみに起因するであろう。その林の偉大さであるが詩で見る限り軍医として極めて有能な働きをしたことが窺える。即ち和蘭軍に従軍してアチエで亜珍軍と戦闘に及ぶが(明治六年末から

七年にかけてか)、その時の活躍がうたわれている。恐らく、鷗外も熟読したと書いている「閼珍紀行」にその様子が詳しく書かれているのであろうが、これは現在、鷗外文庫にも国会図書館にも収蔵されていない。ただ小西氏が引く「日新真事誌」(明7・1・18)の記事で僅かにその様子が知られる。伝染病流行時とは言え兵士がいかに軍医を信任し、又、将帥がいかに軍医を重んじているかを肌で知り、「平素術ヲ研究シ此依頼ニ答ヘザル可カラザル」ことを再認識しているのである。軍医の責務重大であることを鷗外は林紀を通して追体験しているのである。加えて、その「気象英邁」を賞揚するも、これよりしばしば「辺陲の変」に従軍し(明治十年西南の役では征討軍団軍医部長)、客死の原因となる宿痾(腎臓疾患)を募らせて行く。鷗外がここに来て慷慨し眦を決して水煙茫々たる辺を眺め、林の雄志を紹がんとしていることは明らかである。志半ばで仆れた偉大な先輩への哀惜の情と、その雄志を紹がんとする鷗外の決意とは手に取るように分かるのであるが、私にはここで林紀が和蘭軍に加わり閼珍軍と戦ったそのことに、鷗外が全くと言っていい程、関心を示していないのが不思議と言えば不思議である。いや、これは何も遠い鷗外の時代に限ったことではないかも知れない。小西論文にも「蛮地」「蛮地従軍」という言葉が使用されている。オランダ軍から植民地戦争をしかけられるスマトラのアチエはなぜ蛮地なのか。ここには端なくも鷗外と同じ目でオランダとアチエの関係を見ている目があるのである。陸軍省がなぜ軍医監林紀をオランダ軍に編入させたのか、その意図もしかとは分からぬが、恐らくは軍医学の必要に迫られた実地検分(実習)のようなものであったのであろう。[35] このあたりの事情は「閼珍紀行」が発見されればはっきりするであろうが、それにしても林の方にもどれ程、植民地戦争という認識があったであろうか。ただ文明国が蛮地を攻める、富国強兵の意味もそこにあるという認識であろうか。日本が文明国になることは欧米の列強に伍して植民地を獲得して行くことだというきわめて単純な図式が、この時代のエリートにはなかったであろうか。鷗外の「航西日記」を読んでいて漠然とした不安を感ずるのはここである。

鷗外のアジア認識が如何なるものであったかは(三)の詩編でおおよそ見当がつく。そして、この部分にこの日記の最

大の独自性があるわけであるが、詩の分析に入る前に日記に窺われるアジア情勢全般を見ておけば、ホンコン（英）、サイゴン（仏）、シンガポール（英）、スマトラ（蘭）、セイロン（英）、アデン（英）、スエズ（英）と寄港地やその周辺は完全にヨーロッパ列強の支配下にあった。更に領土と権利の拡大を狙って列強は虎視眈々とその機会を窺っていた。九月一日、香港の領事館で中尉島邨于雄[36]から清仏戦争（明17・9・6より公式の戦闘開始）の戦況を詳しく聞く。九月八日、サイゴンで仏軍兵舎の前を通り、途中、左足義足の兵士に遭ったことを書き留めている。九月十三日、スマトラ沖を航行しながら和蘭人と原地人との間に未だ戦闘が続いていることも記している。又、英国がいち早くシンガポール、アデン両港を開き海上の要衝を押さえ、軍事・貿易上、海上権を征覇し着々とアジア支配を押し進めて行ったその跡をつぶさに実見したわけである。ここからは当然、福沢諭吉を持ち出すまでもなく、列強の支配を逃れ一国の独立を願う気概と使命感が生まれて不思議ではない。幕末から明治にかけて欧米に渡航した多くの人達の共通した思いであり、愛国心（自立・自尊の心）であろう。それ故、支配されたアジア同胞への同情と何らかの感慨があって然るべきであるが、この面での鷗外の叙述は意外と素っ気無いのである。

寄港地での原地人の風俗や生活を点綴しながら、鷗外はこれに一切、批評を加えていない。水中に潜って客の投じた銀銭を拾う少年（シンガポール）、彩禽を売りに来る児童（同）、鼻に金環を穿つ女性の風習（シンガポール、アデン）、その他の描写に見られるものは風習の違いを別にすれば、大方はアジアの貧しさであり、未開の地の後進性であろう。これに対し鷗外が如何なる感慨を持ったかは憶測の域を出ないが、久米邦武や成島柳北とそれ程、隔たっていたとは思われない。「貧民集リ来リ、物ヲ売リ銭ヲ貰フ、蟻附蠅散シテ厭フヘシ、駝鳥ノ羽ト毛トヲ売ル、価ヲ眩スル数倍ナリ」（実記、アデン）「尤モ厭フヘキハ、『ゴール』近傍、村々ノ童幼、客ヲ認ムレハ、集テ銭ヲ貰ヒ、靦トシテ恥ナク、追ヘトモ亦来リ、遊観ヲ妨ケ、殆ト堪ヘカラス」（同、ゴール）という「実記」の叙述と、「賤民婦児ノ狡黠喧噪ナル実ニ厭フベキヲ覚ユ」（日乗、香港）「女子亦袒シテ跣ス鼻ヲ穿ツテ金環ヲ垂レシ者アリ奇怪極マレリ」（同、

シンガポール）「土人狡猾無恥人ニ迫テ物ヲ売リ囂々蚊蝸ノ如クナルハ極メテ厭フ可シ」（同、ゴール）という「航西日乗」の叙述の何とよく似ていることか。そして、このアジアの厭うべき状態の原因を「実記」は「人民ミナ游惰ニシテ只驕陽ノ下ニ起臥シ、生命ヲ偸シ、曽テ営生ノ苦ヲシラス、児童ヲ育スルモ、逸居教ナク之ヲ放テ、客ヲ逐ヒ銭ヲ乞丐セシムルニ至ル、沃土ノ惰俗、此ニ至テ極ルト謂ヘシ」と、気候・風土にその多くを見ている。「沃土の惰俗」—豊かな風土が人間を駄目にしていると見ているのである。この自らを自覚しない民—それを漱石は「亡国ノ民」と呼び「亡国ノ民ハ下等ナ者ナリ」（明33・10・1　日記　於コロンボ）と極め付けている。恐らく邦武、柳北、鷗外の底に流れているものは、漱石のそれと同じであったろう。言葉がきつければ、「亡国ノ民（未開の民）、哀レム可シ」という憐憫の情と言い替えてよい。このことの意味は鷗外の詩に当たることで、いっそう明らかになるであろう。

3(ア)(イ)は共に福建を過ぎる時、台湾を望んで詠んだものである。(ア)の方は「国姓爺合戦」で有名な鄭成功の鹿耳門（ラクエモス・カナル）での活躍を偲んだもの。父芝竜の志を継ぎ本土で抗清復明の闘いを展開していた成功は、一六六一年（寛文元）、オランダ人に占拠された台湾奪回のため三月に台湾に赴き、十二月にゼーランジャ城を陥れる。ゼーランジャ城は安平（台湾の西南、台南の近く）にあり、湾内には他にプロビンシヤ（赤嵌）城と鹿耳門があった。「鹿耳門は、航海の危険区域で、とおく浅瀬がつらなり、大船はとうてい入港できない。オランダ側は、むしろこれを天然の要害とし、両域を中心に守備をかためていた。成功は、何斌を水先案内とし、深さ一丈余の大満潮時をみはからって、一夜のうちに一挙に船隊をのりいれた。そして、まずプロビンシャ城を急襲した」[37]。バタビアからオランダの援軍が来たが暴風に遭って大敗に終るというのが史実である。その成功も翌年の五月、台湾で没する。享年三十九歳。ここで鷗外が共感をもって鄭成功を称えているのは、言うまでもなく母が長崎の田川氏の出であるという日本との縁と、明朝再興という大目標を掲げていることに依る。日本人の血を享けた人物が祖国復興（明朝再興）のため、まずその拠点の地で外敵の侵入を打ち破るというのは、明治十七年当時の青年森林太郎の愛国心に訴える所が大き

かったであろう。ここに、ヨーロッパの列強対アジアの植民地という構図を読み、列強からの独立を主張するナショナリズムの高揚を指摘するのは無理であろうか。これは当時のアジア人一般については無理であったかもしれないが、少くとも森林太郎にはこのような視点が可能であったはずである。しかし、ことはそのように単純には行かないのである。

3(イ)は、明治七年のいわゆる征台の役（台湾事件、台湾出兵）を回想したものである。維新後、最初の海外出兵であり、翌年五月の千島・樺文交換条約調印と並び国民のナショナリズムを煽った事件である。出兵の契機は明治四年十一月、琉球人五十四名が台湾に漂着し原地人に殺害されたことによる。出兵の七年五月まで二年半ばかりあるが、この間、征韓論が絡み、又、琉球の帰属問題や台湾原住民の統治について清国と意見が合わず出兵は延び〳〵になっていた。明治六年十月、征韓派が敗北するや、「内務卿大久保利通らは当時高まっていた士族の不満をそらすため、征韓論に代わって台湾出兵計画をすすめた」[38]。諸外国の反対で中止を決定したが、西郷隆盛の弟従道を都督とする三六〇〇名の兵の勢いを押さえ切れず、出兵の止むなきに至った。清国との間に和議が成立し日本軍が撤兵したのは七年の十二月である。これで見る限り、台湾出兵はそのきっかけは兎も角、琉球の領土権主張（琉球処分は明治十二年）と征韓論の一変形にすぎなかった。士族の不満はくすぶり続け明治十年の西南の役につながって行くのは誰の目にも明らかである。

さて、この征台の役を詠む鷗外の視点であるが、「冥頑」を破ったことを讃え、異国の「蛮烟瘴霧の間」に埋もれている「天兵の骨」を憐れむというものである。言うまでもなく日本国側に立って戦死者を悼み、戦勝を寿いでいるのである。これは必ずしも鷗外一人の感懐ではなく、当時一般の日本人のそれであろう。そしてここに注意すべきは日本軍が闘った相手がいわゆる「生蕃」（高砂族、現在、高山族の呼称[39]）と呼ばれる原住民であったことである。漢民族に従った熟蕃に対して抵抗した原住民の呼称であるが、この原地人を見る鷗外の目には明らかな偏向がある。即ち「冥

頑」と呼び、その棲む地を「蛮烟瘴霧間」と形容していることである。日本国家に服従しないそのその頑さを頑冥とし、その棲む地を蛮烟瘴霧（毒気を含んだ霧）の立ち込める野蛮な未開地としている。そのような現地人が日本軍に平定されるのは当然とする意識であり、これはそのまゝ明治二十八年の台湾統治につながって行くものであろう。つまりこの詩には、一方では列強のアジア支配に憤りながら、他方では列強と肩を並べるために大陸進出と植民地政策を押し進めようとする新政府の意図を先取りするものがある。鄭成功がオランダ軍を蹴散らしたことに拍手する気持と、日本軍が台湾原地民を平定したことに拍手する気持と、両者、ナショナリズムに於て矛盾しないのである。そして、このナショナリズムを煽る格好の書が当時（明七・一二）、出版されていたのである。それは染崎延房の『台湾外記』（一名、「国性爺」）呼ばれる書物で征台の役にちなんで出版されている。注目すべきは国性爺と台湾出兵がそのまゝ重ねられていることである。国性爺の偉業がそのまま台湾出兵の口実になるというこの論理を、鷗外は台湾を詠んだ二首の詩で踏襲している。又、出兵の理由如何にかかわらず、この戦いに実際に参加した人達には別の感慨があったというのは頷ける。「航西日記」を評した長瀬時衡もその一人であるが、3(イ)について「実に明治七年の役は三軍、ことごとく瘴毒に罹り余も亦病む。幸いに生還して今日此の詩を読む。竦然として涕下る」と述べている。従軍者には「蛮烟瘴霧の間」が実感として理解できたのであろう。従って、その感想も、現在我々が表現のみを通して理解するそれとは余程、異るであろう。香港で会った島村干雄も従軍の経験者であるから、鷗外の回りの軍関係者にはかなりの数の関係者がいたのかもしれない。それらの人達からその時の模様を聞き及んでいたものか。しかし、体験だけでは詩は語れない。体験者にいかに切実であっても、その詩が客観的に読者に送り続けているメッセージについて、我々はこれを正確に理解しなければならない。

九月四日、香港で作られた二首もその意味するところは複雑なものがある。5(ア)はアヘン戦争（一八三九～四二）もはるか昔のことになってしまったが、「滄桑之変」の言葉通りこの地もすっかり変ってしまったことを、喜ぶべきか、

はた悲しむべきか。誰かこの草深い荒地が英人に与えられて、このような賑いを見せることになろうと予想しえたであろうか、というものである。南京条約（一八四二・八）の結果、香港は英国に譲渡されたわけであるが、言うまでもなく帝国主義の植民地支配の一環であった。この立場を肯定すれば殷賑はめでたく、中国の独立を尊重すれば悲しむべきことである。しかし、問題はもっと複雑である。植民地支配は肯定できずとも目のあたりにした文明の圧倒的な力に鷗外は愕然としているのである。ここからは文明の西洋と後進、未開の東洋という対比も出てこようし、これから文明の恩恵に与ろうとしている鷗外にとり、眼前の景を無下に否定しきれない複雑なものがあったであろう。簡単に帝国主義者の立場にも、又、愛国主義者の立場にも立てなかったのである。

この複雑な思いが次の5(イ)に投影していないだろうか。「家書草し罷んで意凄然たり」には鷗外の個人的感慨があるのかも知れないが、二句の「坐(そぞろ)に層巒烟霧の起こるを見る」とつなげてみると、ぼんやりと茫然自失している様が目に浮かぶ。家書を書き了えた気持と何かそぐわないものを感じる。ここは香港で実感した前詩の複雑な思いの余韻と取りたい。かすかに揺れ動く思いが「日落余光猶在波」にも、バナナを売る声にも聞こえる。鷗外は憂鬱な気分に襲われている。

九月六日作の6は安南山下を過ぎる時、伏波将軍の馬援を弔ったものである。馬援については「後漢書」に馬援伝があり詳しい。それによれば馬援は後漢の光武帝に仕えた武将であり辺境民族の平定に力があった。安南との縁は交阯郡に徵側・徵弐の姉妹の反乱があり、これを討つために伏波将軍を拝命し、十九年これを降した。その後、匈奴、烏桓の攻撃にも参加している。従って、交阯で命を落としていないので、ここで鷗外が馬援を弔おうとするのは史実に反するが、そのことはとも角、ここで何故、馬援が出てくるかが問題であろう。辺境の服(まつろ)わぬ人々（いわゆる蛮族）を討つ馬援はそのまゝ征台の役で原住民を討った日本軍と重なる。史実はどうあろうと彼を弔うことは征台の役で戦死した兵士を弔うことと重なる。「埋在蛮烟瘴霧間」と「烟雲何処吊伏波」とが呼応している。鷗外にはいわゆる蛮民

と呼ばれた原住民に対して、何か本能的な恐怖のようなものがあるのではなかろうか。「蛮烟」や「烟雲」という言葉は恐らく東南アジアの気象条件と密接に関わる言葉ではあろうが、「水煙」「烟霧」の彼方に何か得体の知れない恐るべきものが隠されている、というイメージにもとれるのである。未開の獰猛、野蛮への恐れとこれを平定し文明に導かねばならないとする使命感が鷗外の中にある。そのためには未開がある程度犠牲になるのも止むを得ないとする論理がある。その意味で鷗外は、当時の西洋の学問をいち早く身につけた人がそうであったように、典型的な開明主義、近代主義の立場に立っていると言えよう。

九月十一日のシンガポールでの作（7）は香港での作と基本的には変らないが、そこには香港で感じたような躊躇（たゆたい）の気持（喜還愁）は最早ない。かつての「蛮烟水郷を埋む」地を一挙に繁華にした英人の「点金の術」（錬金術）に、ただ感嘆し瞠目しているのである。香港でのショックはここでは薄れ、イギリス文明の圧倒的な力の前に、ただ脱帽するばかりである。

前にも触れた九月十三日作の林紀を悼む詩について一言すれば、そこには抑圧される側への思いというものが全くないということである。閼珍軍の奮闘、スマトラの抵抗が何を意味するか、鷗外の詩からは窺えない。逆に「聞く其の土人との戦い、猶、未だ止まざる也」に、はっきりと相手側への無関心が窺える。大先輩林紀が蘭軍に従軍し、その林を悼む詩であってみれば、それも当然なことかも知れないが、それまで植民地化されつつあるアジアを見てきた人間にとって、この余りにも素っ気ない切り棄てはやはり気になる。オランダ軍を敗った鄭成功を讃えた鷗外は、ここでオランダ軍に抵抗するアチエ軍の側にも立てるのである。しかし、そうはならなかった。列強によるアジア支配を目の当たりにして、鷗外の危機意識は自国の独立にのみ注がれ、アジア全体の民族の独立にまでは及ばなかったということであろうか。時代が早すぎたのであろうか。ここで鷗外も序文を寄せたあの「浮城物語」（明23）を想起したい。「浮城物語」は発表は二十三年であるが発想は既に十七、八年にあり「経国美談」と踵を接していたと言われる。(40)

従って、作品世界の現実は二十三年次の世界情勢と必ずしも一致しないが、そこは作品世界の時間が明治十一年三月以降の数ヵ月であるという設定で旨く切り抜けている。意図する所は主人公作良義文を中心に「まづ南洋貿易によって兵備を整へ、印度洋に乗り出し、一無人島を占領し、そこを根拠として、当時フランスの有となって間もないマダガスカル島(明18のこと)を取り、更にアフリカに入って、中央アフリカに一大版図を伐り拓かうといふもの」[41]であった。その南進主義、国権主義は誰の目にも明らかであるが、作品はインド洋に乗り出すまでのボルネオ、スマトラ、ジャワ島を中心とした活躍で終っている。問題は主人公達がジャワ島の王室と組みヨコカルタ、ソラカルタを拠点に蘭軍と闘いこれを島から追い出そうとして、バタビア攻略寸前にまで漕ぎつけるという構想である。計画は王室の寝返りにあい失敗に帰するが、列強の植民地支配を打破しようとする意図は明らかである。これに日本男児が加担するという構想は自国一国の独立のみならず、広くアジア全体を解放しようとする意図に支えられている。その意味では龍渓のアジア全体を見る視野は大きいのであるが、悲しいかなこの視野はアフリカ侵攻と裏腹の関係にある。アジアの独立に加担しながら、一方では他の未開の地を犠牲にするというこの論理は両刃の剣である。こういう矛盾したものが当時の啓蒙家、開明派に共通してあったということは記憶に止むべきことである。龍渓が改進党員であり、政治小説を書き、かつ、自由民権の嵐が過ぎた時点ということを考慮に入れても、この小説に於けるアジア認識と鷗外のそれを比較する時、興味深い対比がなされる。両者が列強のアジア支配に危機意識を募らせていたことは言うまでもない。そして、共に自国の独立を願っていたことも共通する。そのために西洋文明を輸入することが不可欠であるとすることも共通していた。しかし、アジアの解放という視点は鷗外にはない。未開、野蛮な地は外圧によって文明化されるしかないという「優勝劣敗」の論理が、そこにはほの見える。鷗外にあるのはヨーロッパと対等になり、列強がアジアで手にしている利権を日本も行使することにあるとする考えであったと言えば言い過ぎであろうか。林紀を悼んだ詩中、「西人の手段、看て既に透し、条理、井然として胸裏に存す」とあるのは何のことか必ずしも明確ではな

いが、蘭軍に参加してその意図を明確に認識し、帰国後、天子に奉じたともとれる。西人のアジア支配の意図を正確に見抜き、これに対する対抗策を講ずると取れば、林紀の認識はそのまま鷗外に重なるであろう。軍医として両者のアジアを見る目にはそれ程の隔たりはない。一方、龍渓の方はアジアの独立・解放の意図を持ち乍ら、他方にアフリカ侵略という矛盾を孕んでいた。これを合わせれば解放に名を借りた侵略という、あの太平洋戦争の論理につながって行くのである。そのような危険性を孕みながらも、ジャワ解放をうたった当時の龍渓の真意はアジア侵略になかったことを確認しておきたい。それはアジアを未開、野蛮視する鷗外の認識とやはり際立っている。改進党の政治家と軍医、ヨーロッパの立憲制を見た者と見ざる者との違いであろうか。

さて、以上で「主にアジアの現実と危機意識」をモチーフとした詩を見てきたわけであるが、このグループに「航西日記」の独自性が特に顕著であることは既に述べた。この独自性が何であるかを最も的確に言い当てているのは、同時代人で、かつ、「航西日記」を評注した静石長瀬時衡である。「衛生新誌」最終回（十一号　明22・12・16）の末尾に静石の全体評が載っている。

近世、泰西に航する者、各紀行有り。皆、政教風俗より草木虫魚の微に至るまで詳紀(42)して遺す無し。諸国の事情以て見る可し。然るに森林太郎君の航西紀行は行文作詩、慷慨悲壮の余より出で、一種風濤の気、紙上に溢る。人をして一読、神、馳せしむはまことに紀事の上乗と為す。古人謂へらく、詩は心の声と。猶ほまことなり。誰か又、以て文雅、事を済さずと謂はんか。予、自ら揣らずして評語を加ふ。亦、風濤に激せらるるため也。

明治己丑一月　　辱知静石長瀬時衡題

明治二十二年一月の評であるから、前年の暮れあたりには既に読了しているのかも知れない。ここで注目すべきは言うまでもなく、「慷慨悲壮の余より出で、一種風濤の気、紙上に溢る」である。小島氏は「迅風と大波とがぶつかりあうような気迫が紙面にあふれ出た逸品であると評したものである」と注しながら、これが当時一般の誇張された讃

め言葉、常套句であるとされるのは合点がいかない。外交辞令が全くなかったとは言わないが、静石の丁寧な評注を読み、かつ、最後の「予、自ら揣らずして評語を加ふ。亦、風濤に激せらるるため也」を参看すると、「航西日記」に共感する所大で、とても通り一遍の讃め言葉とは思えないのである。静石は同時代者として、又、台湾の役に参加した者として「航西日記」に充満する「慷慨悲壮」「一種風濤の気」が痛いように分かった筈である。「航西日記」からこの二つの気を読み取れない人は読者として失格である。

そして、この「慷慨悲壮」「一種風濤の気」が最も顕著に出ているのが㈢のグループの詩である。見てきたようにそれは東南アジアの厳しい現実と、そこから自国を衛ろうとする気概と使命感に満ちている。西洋の学問と技術を身につけ、西洋に追いつき西洋と対等たらんとする激しい意志が切迫したリズムの中に見透かされる。「慷慨悲壮」「一種風濤の気」とはヨーロッパ列強より自国の独立を衛り、列強と対等たらんとする意志の別名であった。そしてこれが「航西日記」を独自たらしめているものの実体であった。

この独自性とも関連するのが、「英雄への思い」をうたった㈣のグループである。ここには鄭成功、馬援(伏波将軍)、ナポレオン、ガリバルディの四人が登場する。鄭成功は外敵を敗った台湾の英雄、馬援は未開の民を平定した中国の英雄で共に鷗外のナショナリズム(愛国心)に訴えるものがあったのであろう。後者の英雄は共にヨーロッパ人ではあるが、これもナショナリズムと密接に関わるであろう。この内、ガリバルディを詠んだ11㈠に注目したい。「平生の戦闘、私讐を捨つ。自由の一語、鉄より堅し」とあるが、鷗外にはこの「自由」の一語がどれ程、明確に認識しえたのであろうか。ここで想起したいのは「実記」の当該箇所である。「往時仏国革命ノ乱ヨリ、帝王専治ノ威権漸ニ衰ヘ、民権自由ヲ展ル気運トナリタレトモ……(略)乱定テ後ニ、以国ノ公論ニヨリ、『サルヂニヤ』王ヲ奉シ、一統ノ治ヲ創メ、立憲ノ政治ヲ建ル、固リ『カルバルヂー』氏ノ意ニアラス、猶依然ト共和論ヲ主張シ、退テ此島ニ帰リ、欧洲ノ民権論ヲ維持シ、常ニ帝王ヲ廃シ、僧権ヲ廃スルヲ己ノ責任トセリ」(圏点引用者)とある「民権自由」「共和論」

に注目したい。久米は歴史学者であり、欧米を実見しただけにそのガリバルディ理解は正確である。自由民権、共和制の立場からこの英雄を理解している。のちの自由民権論者につながる理解である。例えば、このような理解を持てばスマトラで蘭軍と闘珍軍が対恃する時、どちらの側にその人が立つかは明白であろう。鷗外が闘珍軍につかなかったのは、その「自由」「英雄」理解が多分に観念的なものであったことを物語るであろう。自由民権の洗礼を受けていない鷗外の英雄論は、所詮、明治初期のナショナリズムに結びつく単純なものであった。

最後の(五)「西洋への憧憬」は今までの詩群とは性格を異にする。ここにはこれから鷗外を待ち受けている華やかな未来＝西洋がある。十月二日のポートサイドでの作（10）は楽堂で男女二十名編成の管絃合奏を聞いた後、ビアホールででも杯を挙げた時の作であろう。この時の音楽が西洋音楽か民族音楽かはっきりしないが、とも角、始めて耳にする西洋音楽に近いものと思われる。紅海、スエズ運河と両岸、満目赤野の砂漠地帯を通って来た人間にとって、耳にする音楽も女達の華やかな声も、共に心蕩かすような甘美で心地よいものであったろう。これから地中海、いよいよ西洋という気持の昂りがあり、西洋へのあくがれ心はいや増さる。

マルセーユ入港まで七編の詩を作っているが、その第二首目(12(ア))に注目したい。「氷肌、金髪、紺青の瞳。巾幗、翻って看れば心更に雄なり。萍飄（へいひょう）、蓬転の険を怕れず。月明の歌舞舟中に在り」というのがそれである。透き通るような肌、金髪、紺青の瞳、その婦人が通り過ぎるのをチラッと振り返って見れば、髪飾りが揺れている。心が奮い立ち、この身がどうなろうと知ったことではない。今宵、月明の下、舟中で歌舞の宴がたけなわである。何とも激越な詩であるが、若き鷗外の真情がほとばしり出ている。全体に抑制された筆致の「航西日記」の中で、この作は特筆に値する。地中海に入り、鷗外はそれまでの東洋世界を全く忘れたかの如く、西洋文明へのはやる心を押さえかねている。それまでの抑圧された感情が一気に解放されて心は西洋にひた向かう。ここで氷肌、金髪、碧眼の西洋女性への熱き思いがうたわれたことは象徴的な意味を持つ。この場合の西洋女性とは言うまでもなく、西洋文明そのものを意

味する。ポートサイドの音楽、マルセーユの瓦斯燈の光、ストラスブールへの汽車、パリのオデオン劇場が西洋文明そのもののシンボルであったように、舟中の西洋女性も西洋文明そのものであった。以後の鷗外の西洋文明との関係が女性を通して展開するであろうことは想像に難くない。女性を通して感情の解放を知り、「まことの我」に目覚めて行く過程は「舞姫」はじめドイツ三部作に詳しい。その意味でこの詩はそのまま、「独逸日記」とドイツ三部作に直結するものである。それにしても女性を通して感情の全解放を図ろうとした鷗外のドイツ三部作のモチーフが既に航海中にあったということは記憶されてよい。ただ舟中で感じた文明のはなやかさ、ときめきの実質は何であったかとなれば、話は別である。

十月九日、パリ・オデオン座での観劇も、これから始まる西洋での自由な生活と、感情・感覚の解放を見事に予見している。「宮中愛」を観ながら、「女優の名妹に扮する者、媚態横生、人をして鎖魂せしむ」と書き止めているが、女優とは言え、その仕草に心動かされている点、事情は舟中詩と同じ。

地中海に入り西洋への憧れが際立ち、それまでの部分とは鮮やかなコントラストをなしている。前半部も鷗外の真実の声であろうが、マルセーユに到着して日記は華やかな未来を約束するかのように終っている。そして、事実、それは「独逸日記」に現実のものとなっている。従って後半部にも「独逸日記」とのつながりで大きな特質があるわけであるが、見てきたように日記にはいくつかの大きな特質、独自性があった。中でも鷗外のアジア認識を問題にしてきたのであるが、その独自な認識においてやはり際立っていると言えるのではないか。「実記」にもその視点がないわけではないが、「航西日乗」と比較した場合、両者の違いははっきりしている。「航西日記」が「実記」や「日乗」を参照しながら、その中心となる部分においては鷗外の全くの独創で成り立っていることが、これで明白であろう。

三　「航西日記」の注解二、三

川口久雄編『幕末明治海外体験詩集』（昭59・3　大東文化大学東洋研究所）は幕末から明治にかけて海外に渡航した人々の漢詩を集めたアンソロジーとして画期的な意義を持つことは、諸家の指摘するところである。収録詩人六十二名、詩数八百四十五首というその数もさることながら、このような試みが今まで皆無であったところにその先駆的な意義がある。今、話を全体に及ぼさず当面の問題である「航西日記」について限定し、特に注解を中心に二、三気づいた点について論じてみたい。

日記のはじめに位置する大学卒業時（明14・7）の詩「一笑名優質却孱」の注解と口語訳を見る限り、かなり不安を感ずるのは私だけではないであろう。「名優」とひっかけてであろうか、「私は医学部を卒業して晴れの恩賜賞にあずかったが」と口語訳しているが、担当者は鷗外をトップ卒業者と捉えてかかっている。これでは「空しく阿逖をして鞭先を着けしむ」の解釈が不可能になってしまうが、案の条、苦しい解釈をしている。鷗外が二十八人中八番の成績で卒業したことは、簡単な鷗外年譜にはすべて載っている。正確を期したければ「明治十四年七月の文部省公報の東京大学新医学士」の写真版が長谷川泉『森鷗外』（「写真作家伝叢書2」　昭40・4　明治書院）に掲載されている。[43] つまり、基本文献にも当たらない、鷗外についておよそ無知な人が担当になっているということである。ここの無知がたたり「唯だ、蘇生の牛後を愧じしを識るも、空しく阿逖をして鞭先を着けしむ」の解が全く意味をなさなくなっている。トップ卒業は三浦守治であり、彼が阿逖らしいことは卒業生一覧表を見れば、おおよそ見当がつくところである。こゝで又、注釈者はまことに単純なミスを犯している。「鶏口となるも牛後となるなかれ」の蘇生を蘇東坡と解しているのである。「語注」で「戦国策」のことわざとしているから蘇秦（戦国時代）のことでなければならないのに、

なぜか北宋の蘇東坡になるのである。全くつながらないものがつながるのであるが、それは蘇軾の詩に「牛後」の一語があるためのようだ。即ち、「蘇軾が鳳味硯の銘に『坐ろに竜尾たるとも、牛の後たるを羞づ』とあるに拠る」と注しているが、この訓み自体に問題がある。蘇軾の詩「龍尾硯歌并引」に「余旧作鳳味石硯銘、其略云：蘇子一見名鳳味、坐令龍尾羞牛後」とある。龍尾硯、鳳味硯はその名の通り、硯石の名である。龍尾硯の方は龍尾山に産する硯石である。従って、牛後と対比して「竜尾たるとも」という訓み自体出てこない。ここは「坐ろに龍尾をして牛後たるを羞かしむ」とでも訓むべきか。意はあの龍尾硯よりも鳳味硯の方がはるかに勝っていたということである。こう解したところで、例のことわざとも蘇東坡とも無関係であることは言うまでもない。次の「阿逖」を注解者は不詳とするが、先鞭をつけるの故事の祖逖から来ていることは既に神田孝夫氏の論考にある。[44] ここで決定的な断を下すことになるが、「航西日記」劈頭のこの詩については、既に神田氏の訓み・解釈とそれを踏まえた小堀桂一郎氏の『若き日の森鷗外』（昭44・10　東大出版会）があるにもかかわらず、注釈者はその存在をすら知らなかったということである。不思議なのは担当者の中に小堀氏の名前の見えることである。加えて「航西日記」の初出に関して氏の手をわずらわせたことが注記されている。

一事で万事は推し量れないが、学問的良心、厳密さを考えた場合、やはりかなり問題があるのではなかろうか。担当者の能力の問題であり、忽卒の間にできたものというような言い訳は通らないであろう。なお、この一首については小島憲之氏が『ことばの重み』で従来の説を踏まえながら評釈を加えている。

引用詩の次に「盖神已飛於易北河畔矣」とあるが担当者にはこの「易北河」が訓めていない。ドイツの著名な河であり、かなりポピュラーな宛字であるが訓めないからと言って非難する気持はない。「航西日記」の如き明治期の漢詩文を扱っていて、最も厄介なものの一つが外国の地名、人名を中心とする宛字であるからである。「航西日記」にもかなり出てくるが、地名は別として「貝屈」「末克耶烏殷」等の人名、フランス船「楊子」号、「羅約児客館」「厄涅華客

館」「設哩路速家」「咩児珀爾客館」等のホテル名、写真館名はおおよその見当はつくものの自信はない。江戸、幕末、明治期を通して日本人が外国の国名、地名、人名、その他の物名をどのような漢字で宛てたかは典拠、用例、ケースがさまざまであって、なかなか一筋縄では行かない問題である。単純化すれば中国の漢訳書、蘭学の伝統と系譜に加えて明治新政府になってからの新訳が加わり、問題を複雑にしている。殊に明治になって外国への渡航者が多くなるに従い、著名でない地名や人名については各自、新しい宛字を工夫しているようである。例えば、セイロンのポイント・デ・ゴールは「航西日記」では「波殷徒噶児」、「白華航海日記」では「彼印土泥俄宇爾」という具合である。但し、漢字ではない片仮名表記でも「ピント・デ・ゴール」（福沢諭吉「西航記」）「ポイントデルカル」（岩松太郎「航海日記」）「ポアン・ド・ガル」（柴田剛中「仏英行」）「ホアントドガール」（渋沢栄一「航西日記」）「ポイント、デ、ゴール」（「実記」）「ポイントデガウル」（「航西日乗」）と一定しない。従って漢字表現でもさまざまな表記となるのは当然である。

さて、エルベ川の宛字「易北」であるが、最初に使用したのは誰かということになる。小島氏はこれを鷗外の創作した宛字と考えて、「史記」「刺客列伝」に見える有名な「風蕭々兮易水寒」とからめて、「刺客ならぬ明治の留学生としての鷗外の決意をみる」と読まれたが、その説の非なること、又、小島氏の「深読み」であることを指摘したのは神田孝夫氏である。[45] 氏は「輿地誌略」に既に「易北」が宛てられていることを指摘された。たしかに「輿地誌略」巻之六（二篇三）に「易北河（エルベ）ハ波希米（ボヘミヤ）ヨリ薩索尼（サキソニー）普魯士ヲ経」とある。面白いことに鷗外が参照したと思われる「実記」の方は「エルフ河」、もしくは「エルプ河」で漢字を宛てていない。とすれば、鷗外はやはりこの書に依ったのであろうか。又、「易北」の宛字は「輿地誌略」を以て嚆矢とするのであろうか。

その問題に入る前に神田氏の解説に若干、誤解を招く節があるので補説しておきたい。氏は「書物は明治三年、南校から官版として出されたものだが、頻りにその版を重ね、明治十年代に入ってもその勢いは衰えず、大版もあれば

小版も出ていた。全十二巻から成り、地図や絵図も多数入った立派な本だ。内容もまた信頼できる」とされるが、この記述からでは明治三年に十二巻すべてが刊行されたことになり、又、その内容の信頼性も著者内田正雄一人の手柄になってしまう恐れがある。まず、後者から見て行けば、十巻までは内田正雄纂輯（もしくは編輯）になっているが、十一、二巻は西村茂樹の編輯である。[46] 又、重要なことは両人は訳者、編輯者であり原作者、原本は別にあるということである。一巻の「凡例」に内田は次の如く記している。

此書原本ハ「マッケー」氏及「ゴールド、スミス」氏ノ地理書共ニ英板及「カラームルス」氏ノ地理書蘭板等ニ拠テ抄訳スト雖モ間マ、類ニ触レテ他書ヨリ抄出スル所少ナカラズ然レモ煩ヲ厭フテ今尽ク其書名ヲ挙ケズ

最後に「康午臈月」の日付があり、明治三年十二月に認めたことが分かる。又、これで内容が正確で地理書として汎く読まれたことの原因が、内田の語学力、編纂能力もさることながら、何よりも西洋の地理書を基にしているところにあったことが分かる。次に十二巻の構成と刊行年月を記せば次の如くになる。

巻	内容	刊行年月	
一	総論・亜細亜洲上	明治三年	大学南校
二	亜細亜洲中		大学南校
三	亜細亜洲下		
四（二篇一）	欧羅巴洲之部	明治四年	文部省
五（二篇二）	欧羅巴洲之部二		文部省
六（二篇三）	欧羅巴洲之部三		
七（二篇四）	欧羅巴洲之部四	明治六年	文部省
八（三篇上）	亜非利加洲之部上	明治八年三月三日	修静館

九（三篇下）亜非利加洲之部下　明治八年三月三日
十（四篇上）亜米利加洲上　（内田正雄遺稿）　明治十年二月八日　修静館
十一ノ上（四篇中）亜米利加洲中　（西村茂樹編輯、以下の巻同じ）　明治十年二月八日　修静館
十一ノ下（四篇中）亜米利加洲下　明治十年二月八日　修静館
十二（四篇下）阿西亜尼亜洲　明治十年二月八日　修静館

確実に言えることは、これが十二巻十三冊本であるということである。はじめ、一巻の「総目」では全八冊の予定であったものが結果的に十三冊になったのであろう。又、五大州を四篇に分け、十一巻を二冊にしている所にやや無理がある。私が参看したのは大阪府立図書館本（十冊本）石川県立図書館本（十一冊本、十三冊本）金沢市立図書館本（三冊本、十一冊本）であるが、発行年月日、監修、発行の形態については不明な部分が多い。大阪府図本の一巻見開きには明治三年康午刊行、大学南校の外に「岐阜県翻刻」の活字が見える。これは大学南校が版元であり各県、各書肆がその版権を譲り受け刊行したということであろうか。この書が売れ出して、しばらくすると石川県学校用出版会社翻刻、山梨県師範学校等の印が見えるので、その流布形態は大よそ想像がつくが、初版（たいてい五千部限の文字がある）の時からそうであったのかどうかが分からない。石川県図本の十二巻の奥付では明治十年二月八日版権免許、十三年十月出版となっているので、版権取得から出版まで時間がかかったようだ。又、大学南校、文部省が版元だとすれば修静館もその系列であろうか。私が当たったのは一本を除けば他はすべて端本であり、見開きや奥付に何も書かれていない本も多く、必ずしも正確に推定できないのであるが、四編は各編ごとに同時刊行されたのではないか、又、監修あるいは責任は一～三巻が大学南校、四～七巻が文部省、残りは修静館ではないかと考えられる。ただ、

ヨーロッパの四冊は大部で、大阪府図本七巻の「明治六年刊行、文部省」（岐阜県翻刻）の印も捨て難く、あるいは四年から六年にわたるのかもしれない。こういう不確定な要素の多い中で、一つ確実なことは、これは明治三年にすべて刊行されたものではないであろうということである。それは十巻に内田正雄遺稿の文字があり、以下を西村茂樹（当時、文部省五等出仕編書課長、三等侍講を経て宮内省御用掛）が引き継いだことではっきりしている。内田は明治九年三月に三十四歳で亡くなっている。このような刊行時期にこだわるのは、たとえば、「米欧回覧実記」や「航西日乗」が刊行、発表された時、既に「輿地誌略」は出回っていたが、彼らが航西の途に上った明治四年十一月や明治五年九月には未が全巻が出揃わず、彼らはその時、何を参考にしたかということである。尤もアメリカの部は完全に未刊ではあるが、ヨーロッパの部が出ていたか否かは微妙な問題である。又、久米、成島より以前に渡航した人は何を参考にしたのかということも大きな問題である。(47)

少し書誌的なことにこだわりすぎたが、本題に戻せば久米、柳北、鷗外らは「輿地誌略」を参考にしているかも知れないが、それだけではないだろうということである。そのことは例えば「航西日記」の表記と「輿地誌略」のそれを比較しただけでもはっきりする。「日記」の法国（法郎西）、徳国（徳意志）に対して「輿地誌略」の方は仏蘭西、日耳曼であり、未だ独逸を使っていない。他に少し気付いた名詞を上げれば（先ず日記、カッコが誌略）、麻陸（マラッカ）（馬刺加）・榜葛刺（ベンガラ）海（孟加拉海）・阿刺伯海（亜拉比亜海）・歴山府（亜勒散得黎（アレキサンドリア））・卜嵬（ポールト、サイド）・葉多豚（エトナ）山（埃徳納山）・洎第尼（サルジニア）山脈（撒丁（サルジニヤ）島）・骨喜（珈琲）と言った具合である。たしかに、「易北河」は「誌略」にはあったが、地名・物名を見る限り鷗外はもっと別のものを見ていた可能性の方が大きい。これは「実記」を見ても言えることであるが、彼らが参看したのは同時代の類書ではなくそれ以前のものであったようである。

「輿地誌略」は明治に入ってからのものだけが有名であるが、実は同名の書は文政年間に既に出ているのである。これは現在、『文明源流叢書第一』（昭44・4　名著刊行会。大正二年十月、国書刊行会版の複刻）で見ることができ

る。しかし、解題が不完全なため、正確なことは分からないが「日本国語大辞典」では「江戸後期の地誌。八巻。青地林宗訳。文政九年（一八二六）成立。ドイツ人ヒュブナーの著を、オランダ語訳したカラメルフの『一般地理学（Alegmeen Geographie）』から重訳した『与地誌』の抄本。世界各国の地誌を記したもの」とある。スタイルは内田正雄のそれと大きく変わるものではない。外国の国名、地名が漢字表記されているのでその異同も知られる。現在の国名と合わない無理な読み、宛て字もあるが、佛郎察（フランス）、独逸都（ドイツ）、撒而地泥亜（サルジニア）、蘇門答剌（スモタラ）、満剌加（マラッカ）等、その後、通行のものもある。原著者がドイツ人であることもあるのであろうか、ドイツについての記述は少なく、「孛漏生（プロイセン）」について僅かに言及があるが「易北河」の宛字は見当たらない。しかし、ここでの漢字表記がその後、淘汰選択されて明治の地理書に活かされていると見るべきである。

その他、幕末の著名な地理書を上げれば、箕作省吾著「坤与図識」全三冊（弘化二～四、一八四五～四七）「坤与図識補」全四冊（弘化三～四）、合衆国褘理哲著、箕作阮甫訳「地球説略」全三巻（万延元年、一八六〇）あたりが考えられる。[48] 前者の方は、はじめに引用西書名が記され、それが天保年間に刊行されたオランダ人のものであることが分かる。又、「地球説略」の方は漢文であるが、中巻の欧羅巴大洲之部を見る限り、現在、通行のものに近い宛字が多い。問題の「易北河」は「伊拉皮河」になっている。この書で注目すべきは（石川県図饒石（にぎし）文庫本）、見開き左頁に書名がありその下に「寧波華花書房刊　一八五六」の文字が見えることである。つまり、この書は既に中国で漢訳されたものに箕作阮甫が訓点を加えたものであることが分かるのである。江戸期、幕末に刊行された地誌、地理書（この部門に限らないのであるが）の多くは一度、漢訳されたものを元にしている場合が多いことが、この一事からでもよく分かるのである。[49]

そのことを更に裏付けるのが本邦に於ける万国地誌書の濫觴とされる白石の「采覧異言」（正徳三年、一七一三　将軍に献上）である。「凡例」に「西人山海与地全図。明儒所訳」とあり人名不明であるが、漢文の「采覧異言」を平易

にした「西洋紀聞」中巻（正徳四）では、それが大明呉中明の「万国坤与図」であることが分かる。蘭書を漢訳したものであろう。「西洋紀聞」ではしばしば、典拠としてこの「万国坤与図」が引用されている。又、アジアに関しては主に元明の史書から取り入れていることが明記されている。残念ながらこの「万国坤与図」を見ることはできなかったが、明、清代の地理、地誌は四庫全書「史部」の部でもかなり採られている。それらを手にして日本の地誌の源が漢訳書にあることを改めて認識した。気付いた表記の対応で言えば「法郎西」（鷗外）「拂郎察」（采覧異言）、「麻陸」「満剌加」、「榜葛剌」「榜葛剌」、「蘇門答臘」「蘇門答剌」あたりである。又、「采覧異言」の「斎狼島」では「隠然足跡尚存。長可二二尺一。仏足至レ此也。寺有二臥仏榻一」「多二椰子一。果有二芭蕉子一」「檳榔。蔓葉。不レ絶二其口一」と、「実記」、「航西日乗」、「航西日記」とよく似た表現が見られる。

これらのことから言えることは、明治の翻訳語、宛字、漢語等を考える場合、先行の蘭学と、時にはその元にもなっている中国での漢訳書についての知識が不可欠ということである。特に鷗外については、医学専攻ということもあり、又、回りにオランダでポムペの指導を受けた西周や林紀のような先輩もいたことから、蘭書についても相当、造詣が深かったと見るべきではなかろうか。[50] 我々、近代を専攻する人間の盲点であり、又、小島憲之、神田孝夫両氏のような碩学にもこの分野への視点が欠落しているというのは不思議なことである。蘭学についての大よその見取図は杉本つとむ氏の大著『江戸時代蘭語学の成立とその展開』全五巻（昭51・3～57・2　早大出版部）で知ることができる。

さて、問題の「易北河」について言及しておかねばならない。残念ながら江戸時代刊行の書にもこの宛字を発見できなかったが、だからと言って、これは内田正雄の創作ということにはならないであろう。恐らく、中国での漢訳書が嚆矢と思われる。理由は発音である。「易北」は現行中国音では〔Yìběi〕となる。カナ表記すれば「イーペィ」である。原語の Elbe の発音に近いのは言うまでもないであろう。[51]「徳意志」は〔Déyìzhì〕、「法蘭西」は〔Fǎlánxī〕、「尼泊爾（ネパール）」が〔Nípōěr〕、「榜葛剌」が〔Bǎnggélà〕、「卜嵬」が〔Bǔzǎi〕となれば、これらの宛字は殆ど中国で作られたと見る

のが自然であろう。特に地誌の国名、地名、山河名に関しては中国での漢訳が日本に入ってきたと見るべきであろう。

同じことは小島氏が問題にされる「骨喜」「珊篤尼」についても言える。氏は『海外体験詩集』の訓みを踏まえながら「『骨喜』（骨非）は今のコーヒーに当たることはいうまでもない。訓読した『骨を喜ぶ』とは『明治語』もしくは『鷗外語』を知らなかった甚だしい誤読である」[52]と言われるが、「骨喜」が明治語、もしくは鷗外語かと言われれば、私にはかなり抵抗がある。鷗外が「独逸日記」で多用したことから鷗外語とされるのかも知れないが、「骨喜」の宛字は鷗外以外にも、又、明治以前にもあったことを強調しておきたい。コーヒーはよほど珍らしく、又、美味と見えて、例えば益頭尚俊の「亜行航海日記」（万延元）には「骨喜」「骨喜蔵」と多出し、又渋沢栄一の「航西日記」（慶応三・一・一二日条）には、「食後、カツフヘェーといふ豆を煎じたる湯を出す。砂糖、牛乳を和して之を飲む。頗る胸中を爽にす」とある。「輿地誌略」では専ら「珈琲（カッヒー）」で、「骨喜」は用いられていないが、杉本つとむ氏の前記書では蘭書に早くから「骨喜、歌兮、珈琲、架非」が用いられていたようである。『和蘭字彙』（安政二～五）ではKoffijの綴りに「コッヘイ」と宛てているが、『波留麻和解』では「コッピ」、他書では「コッペイ」もある。はじめ、薬用と考えられていたようで、そのため、この語への関心も早かったのかも知れない。このコーヒーの場合の宛字は完全に音訳語であるが、「骨喜」を宛てたのは日本人かと言えば、カナ表記と照し合わせて、やはり中国人であろう。「骨喜」は現代音では〔Guxi〕で「クーシー」と読むが、時代を溯れば「喜」（xi）は限りなく「ヒー」に近いと言う。喜を「ヒ」と訓ませるのは日本の漢字の読みにはないが、例えば「喜馬拉」（「輿地誌略」）を「ヒマラヤ」と訓ませているのは、明らかに中国音で読ませているのであろう。ということになれば「骨喜」は蘭書でよく使用された、中国伝来の宛字と言うことになり、何も明治語でも鷗外語でもないと言うことである。蘭書に鷗外が目を通しておれば、きわめて自然に出てくる宛字であったろう。

又、虫下しの薬「珊篤尼」の宛字を鷗外の創作とする「独逸日記」（明18・8・29条）の記述をそのまま肯定されて

いるが、これも如何なものであろうか。やはり蘭書に当たるべきと思うが、私の当たった宇田川榕斉『遠西医方名物考』（文政五、全10冊　金沢市図本）では「珊篤里（サントリー）」なる薬草名が出てくる。薬効は健胃の外に「蚘（蛔に同じ）虫ヲ殺ス」とあるので、サントニンとも近い。「按ニ此薬和漢産未ダ詳ナラズ舶来ノ品ヲ用フベシ」とあるので未だ編者もその実態がよく分かっていないふうである。ほんとにサントリーという薬草があるのか知らないが、とに角「珊篤里」という宛字からは容易に「珊篤尼」もしくは「珊篤寧」は作れるのである。蘭書に通じた鷗外のいたずらのように思える。(53)

回り道をしてしまったが、要は明治の翻訳、宛字等の漢語表現を考える時、明治以降の文献だけでものを言うのはきわめて危険であると言いたかったのである。

なお、本節では「航西日記」の注解を問題としていたので、『海外体験詩集』で気付いたいくつかの点について列挙しておきたい。

○晩過遠洋…遠洋落日旅愁生（8/24）―この遠洋は一般名詞のそれではなく、遠洲灘のこと。

○丹波何曽無豪気。毎遭風濤即消磨（8/29）―「丹波何ぞ曽て豪気無からん」と訓む。今までは元気だったのに、その元気はどこへ行ったのかの意。

○滑喉唱出子夜歌（同）―ここは一般的な子夜歌とするより李白の「子夜呉歌」とした方がふさわしい。

○領事署二記室来会（9/2）―原文にない「秘書官」の三字を「二記室」の次に挿入している。

○坐見層巒烟霧起（9/4）―「坐して見る」と訓んでいるが「坐ろ（そぞ）に見る」と訓むべきである。

○扁舟来売芭蕉子（同）―「芭蕉の実」とするが紛らわしい。バナナとすべき。

○安南山下蘯舟過（9/6）―「蕩（あそ）べる舟」とするが「蘯舟（とうしゅう）」で手こぎの舟のこと。

○猶有待於三版（9/7）―「三度歩輿をのりかえて待たなければならない意か」と珍説を述べているが、三版は三板・舳舨・舳板のこと。既に九月一日の条に出てきていながら、そこで注せずここで注するのは担当者が複数のせいか。

○以蔓葉石灰并嚼之（9/8）―「蔓葉石灰を以て並びにこれを嚼む」と訓んでいるが、ここは「併せて」と訓む。

○原聞地多蚊蚋（9/8）―原文「蚊蚋」を「蚊虻」に誤る。

○毎為客泗取遺物（9/11）―原文「泗」を「洇」に誤る。

○自此屢閲辺陲変（9/13）―「その後、しばしば辺境の変事調査に従事した」と口訳されるが意味をなさない。「辺陲の変」は辺境での戦争で具体的には林紀が参加した西南の役、その他をさす。

○如今誰起紹雄志（同）―「如今、誰か起ちて雄志を紹がん」と訓みながら、なぜ、「今、誰か起ち上がって彼の雄志を紹介するものがあろうか」となるのか理解に苦しむ。訓読者と口訳者は別人なのか。紹ぐは継ぐで説明不要。

○以有微恙也（9/26）―「微恙」に「びけい」と振る。「びよう」の誤り。

○気候漸北漸冷（9/27）―原文の「漸北」が脱落。

○濬河功就破天荒（10/1）―「河を濬へ功を就して天荒を破る」と訓むが、「功は就く破天荒」「功は破天荒に就く」と訓むべき。

○手挙巨觥聞艶声（10/2）―「艶声」を「なまめかしい音楽」とするが不可。女性のなまめいた声。

○媚態横生。使人鎖魂（10/9）―「媚態ほしいままに生じ、人をして魂を鎖さしむ」と訓むが、上句はいいとして下句は「人をして鎖魂せしむ」で、悲しんで魂が消え入るよりも、心をとろかすようだの意が適切と思われる。

○期爾依然在徳州（同）―「期爾（きすなんじ）むれども」と訓むが無理。「期す、爾、依然として徳州に在るを」が無難。

少しこまかくなったが、大部で見事な装幀の本にしてはやはり杜撰である。最もいけないのは校正がキチンとなさ

れていないことである。誤字、脱字はもとより行が飛んだり、括弧がつけ忘れられたり、原文にない文言が挿入されたり、又、落とされたりで、この本造りの姿勢が一番問題であろう。学問的良心、学問的厳密さを云々されても致し方あるまい。

「航西日記」を離れて言えば、私に最も不可解なのは「還東日乗」の扱いである。どういうわけか「衛生新誌」二十号（明23・5・2）に掲載された前半部だけが採られて、二十二号（明23・6・2）掲載分の後半部が採られていないことである。詩の方は後半部が多いのでなお更、不思議である。（そこには、かつての「日東十客歌」に対する「日東七客歌」がある）巻末に二十号の影印が載っているが、そこにはっきりと◎還東日乗（其一。）とあるので（其二。）のあることは誰でも気付く。現に当該誌は金沢大学医学部付属図書館に架蔵されてある。単純なミスという問題ではなかろう。

又、鷗外で言えば『独逸日記』の十六首（付録の「詠柏林婦人七絶句」を含む）が無視されている。特に「うたかたの記」の舞台であるシュタルンベルク湖で、主にルードヴィッヒ二世を悼んだ五首などは見落とせないものである。担当者、編纂者は鷗外全集を見ていないのであろうか。尤も全集にも思わぬミスがある。全集十九巻の「漢詩」のところで、明治二十一年八月十六日作として三首が上げられているが、これは「還東日乗」を見る限り、後の二作は石黒忠悳の作でなければならない。十六日の条では「賦詩贈興然」として鷗外の詩があり、続けて「又和石君同題詩曰」として二首の詩が載っている。この訓みは「又、石君、同題の詩に和して曰く」であろう。「石君の同題の詩に…」では意味が通じない。この「又」は九日の条で鷗外が詩を賦し、それに和して石黒が詩をなしたことを踏まえる。「石君依韻見贈曰」とあるから韻を踏まえたもので、事実、鷗外の一、二、四句の根、恩、門と石黒の喧、源、門（一、二、四句）は韻を踏んでいる。九日の時のように韻を踏まえなかったが、十六日にも石黒は鷗外の作に和したのである。

収録詩人については、それぞれ、簡単な経歴が付されているが不明のものも多い。私にも始めて目にする名が多く

て、その点でも労作であることを充分に認めるが、それにしても十四人が未詳であるという詩人紹介はいかがなものか。私も未だ詳しく当たったわけではないが、たとえば、足立忠八郎・谷謹一郎・高橋義雄[54]は『大日本人物誌』（大2・5　八紘社）に掲載されている。これらの人物を知るには明治、大正期に刊行された人名辞典の類に当たる必要がある。ここでも不可解な一事は禾原永井久一郎（荷風の父）という著名人について一言も述べられていないことである。最後の詩の〈参考〉に「禾原は明治四十三年重ねて中国への旅に出た」とあるので、担当者に永井禾原が全くの未知の人であったとは思われない。

次に採られた詩人の選択と詩の選択（数も含めて）が当を得ているか否かということがある。『海外体験詩集』と銘打たれているので該当者ならば誰でも良いという考えもあろうが、しかし、単なる風景描写や事実のみを追う詩では、いかにも類型的でつまらない。こちらが無知でその詩人を知らないということも与っているのであろうが、詩人の選択にやや不満を覚える。

幕末の海外体験では、その評価はともかくとして、あの夥しい漢詩（約二四〇首）を残した柴田剛中の「仏英行」（慶応元～二『日本思想大系66　西洋見聞集』所収）が全く無視されているのは、やはり奇異である。

次に明治の元勲達とそれに次ぐ人達の扱いがやや寂しい。木戸孝允（松菊）、大久保利通（甲東）、陸奥宗光（福堂）、副島種臣（蒼海）、西園寺公望（陶庵）、尾崎行雄（咢堂）といった人達である。未だ未調査で不確定な部分もあるが、木戸、大久保は岩倉使節の主要メンバーで「松菊詩文」（明11）、「大久保利通日記」（昭2）がそれぞれある。前者は未見であるので、その時のものがあるか否か分からない。[55]後者の日記には回覧中の部分が欠落していて詩作があったか否かはっきりしないが、他の部分にはかなりの数がある。鷗外との関連で言えば征台の役に関わり、北京会談に参加し帰途、戦迹を巡視して詠んだものがある。

明七年十一月十七日

（於石門）

王師一至懲二兇〔頑〕酋一　　戦克〔貔貅〕三千兵気雄

請見皇威及二〔覃〕異域一　　石門頭〔堡〕上旭旗風

（於亀山麓）

大海波鳴月照レ営　　誰知万里遠征情

孤眠未レ結還家夢　　遙聴中宵喇叭声

（〔　〕は後に改める）

副島蒼海にも征台の役に触れたものがあり、鷗外の「航西日記」と比較した時、征台の役の持つ歴史的な意味が改めて思い起こされるのである。

西園寺陶庵は明治四年より十三年までパリに遊学しており、その間、かなりの詩を残したことは安藤徳器『西園寺公と湖南先生』（昭11・4　言海書房）などによっても知られる。「巴黎客中書感」「入仏京口占」などの作が引用されているが、最も興味深いのはその後二十年経って、再びパリを過ぎた時の詩「星旗楼題壁」であろう。これは『明治漢詩文集』（「明治文学全集」62　昭58・8　筑摩）にも陶庵作として採られているたった一首のそれであるが、共にパリで遊んだ莫逆の友、光妙寺三郎の不遇を傷んだものである。光妙寺三郎は本名満田三郎（三田（みつだ）とも）、山口県三田尻の光明寺（人名辞典はこれを採る）の出で西園寺より一足先にパリ大で学んでいた。星旗楼とはパリにあったカフェ・アメリカンのこと。そこで二人はたまたま邂逅したのである。その時、光妙寺はテオフィル・ゴーチェの娘ジュウジット・ゴーチェ（マンデース夫人）といい仲であった。夫人の若き燕と噂されていた。帰国後であるが西園寺はこの夫人の扶けを借りて、古今集の仏訳『蜻蛉集』（一八八四）を出している。いかにも後の文人宰相らしい。ジュウジットはその MITSOUDA KOMIOSI への献辞で、綿々たる思いを述べている。その光妙寺であるが、のちに「十五

年十二月フランス公使館書記官としてパリに赴任し、当局と意合はず、十七年九月怏々として国に帰った」（『大人名事典』平凡社）とある。ここで我々が想起するのは言うまでもなく「航西日記」十七年九月二十六日、アデンの条「邂逅光明寺三郎。三郎為外務省書記官。自巴里帰者。午後六時開行」である。この素っ気ない記述の背後に思いがけない人間のドラマがあったのである。あるいは、光妙寺のパリを離れた理由の一つにジュウジットとのことがあったのであろうか。失意の人と希望に燃える人はアデンですれ違ったのである。十八年四月、西園寺が駐墺公使として赴任の途次、パリを過ぎる時詠んだのが前の詩であった。三郎、二十六年九月、四十五歳で没。こう見てくると一編の詩の背後に、意外な人間のドラマのあったことが分かる。留学生や渡航者は各々孤立して存在していたのではなく、それぞれ、いろんな形でのつながりがあったことにも留意すべきである。

鷗外ばかりで気が引けるが、鷗外がロンドンで逐客尾崎行雄に会い（「還東日乗」明21・7・10）、「退去日録」（明21・4）を贈られ（7・18）、パリより四編の詩を賦して尾崎に送った（7・19）ことはよく知られている。問題の「逐客相遭話杞憂」については「退去日録」の「逐客」とからめて、小島氏に明解な解がある。私が言おうとしているのはそのことではなく、逐客としてロンドンにある以上、又、咢堂（愕堂、学堂）の号からして漢詩がなければおかしいということである。咢堂には「咢堂詩存」があり、二十一、二年に二十二編の詩がとられている。[56] 残念ながら、二十一年には鷗外の詩に応えたものはないが、「送末広鉄腸帰朝」（十二月一日）「一夜月明、客窓無聊、遙寄鉄腸在巴里」というのがある。鉄腸とは朝野新聞で同僚であり、「退去日録」でもしばしばその名が見えるが、ここは外遊で立ち寄った時の離別である。「還東日乗」にも名が見える高橋義雄も「倫敦送末広鉄腸帰日本」をうたっているが、こちらの方は『海外体験詩集』に入っている。この鉄腸にも留意したい。二十二年の作は本田大吉、原亮一郎とイギリス西南地方に旅した時の十四首である。

陸奥福堂には「福堂詩存」があり、これは明治十一年九月より十五年五月までのものしか収められていない。四年

間の禁獄時代のものである。「航西日記」では陸奥を送って帰る今村清之助と福原允にシンガポールで会っているが、この時の外遊時（明16・1～19・10）の詩は無いのであろうか。『福堂遺稿』（明40・8）『陸奥宗光遺稿』（昭4・1）という本には「福堂詩存」しか収められていない。

副島蒼海には『蒼海全集』全六巻（一～五・詩、六・文　和　大四）があり、これを見る限りでは質量において、明治の元勲中、群を抜いている。清国を舞台に多数の作があり、『海外体験詩集』の二首はいかにも寂しい。

次に、明治の啓蒙家、文人、思想家への目配りが必ずしも充分でないのが惜しまれる。例えば、福沢諭吉、栗本鋤雲、福地桜痴、末広鉄腸、新島襄、中江兆民、岡倉天心と言った人達である。

諭吉のものは共に文久二年のものが二首、全集に採られているが、詩としてどうこう言うほどのものではない。が、洋学一辺倒の諭吉に漢詩があったというだけでも特筆に値する。

露都滞留中作

起来就食々終眠　飽食安眠過一年　他日若逢相識問　欧天不異故郷天

潤八月伊斯把洋舟中

朝漂斯把洋　暮漂斯把洋　十日又十夜　漂盪斯把洋

栗木鋤雲には『匏庵遺稿』（明33・11初版　裳華房）があり、それには「匏庵詩集」（「橘黄吟稿」「匏庵詩」より成る）が収められている。慶応三、四年の渡航詩と思われるものは次の二首である。

丁卯八日船航二印度海一

勁風日日自二西天一　逆駛偏憑一縷煙　印度洋遙紅海遠　我船以外不レ看レ船

巴里牛祭

巧写二殊風一扮二五洲一　満街鼓吹送牢牢　欧天月令無豺獺　唯見仲春人祭レ牛

この他、日本の地で「火輪舶」を詠んだものが三首、「読二勃那抜爾的伝一」が二首ある。福地桜痴（明治四年、岩倉使節と米欧へ）には「星泓詩稿」（「明治文学全集11」の柳田泉氏の解説では〈私のもの〉とある）なるものがあるが未見である。

末広鉄腸に詩才のあったことは尾崎行雄の「退去日録」でも知られるし、尾崎と高橋義雄が明治二十一年十二月、ロンドンを去る鉄腸に共に詩を贈っていることでも知られる。恐らく返しの詩があったものと思われる。その「詩文の才の天性であること」（「明治文学全集・6」）は柳田泉氏も指摘している。柳田氏は「優然集」（詩集か、未見　十七年刊か）を挙げているが、その後の詩作も多いはずだ。「北征録（附北遊草　二十六年十月）」の「北遊草」とは漢詩であろうか。

新島襄には「航海日記」（元治元年五月五日より慶応元年十月まで、全集五巻による）があり、八首ばかりの詩が採られている。新島の憂国の思いは例えば次の詩に窺える。

不堪慨然偶然得一詩（元治元・六・廿一）

自従辞函楯　空被役洋人　憂国還憂国　憤然不思身

全集では五十一首が採録されている。

森春濤について漢詩を学んだ天心には「三匝堂詩草」「瘦吟詩草」なる詩集がある。前者は東京大学在学中のもの、後者はそれ以後（明13～24頃）のもので、夫々、三十三首、十七首ある。海外渡航詩は現在、全集七巻（昭56・1　平凡社）の「詩文集」に入っている。「欧州視察日誌」（明19・10～20・10）所収のものが「渡太平洋」以下五首、「支那旅行日記」分が十九首、その後のたび重なる中国、欧米旅行での作が十六首収められている。通観してみて文人詩中の逸品であることを思い知った。

渡太平洋

一醉抛杯笑上船　一醉　杯を抛げ　笑いて船に上る
鯨波浩蕩大洋天　鯨波　浩蕩たり　大洋の天
中原大勢幾時定　中原の大勢　幾時か定まる
六国連衡猶未全　六国の連衡　猶　未だ全からず
急雨驚風雲在水　急雨　驚風　雲は水に在り
怒潮駆月影如煙　怒潮　駆月　影は煙の如し
桑扶蘭港何辺是　桑扶蘭港　何れの辺か　是
征艦斜臻北斗前　征艦　斜に臻る　北斗の前

（全集の竹内実氏の訓みに従う）

明治十九年十月、フェノロサらと欧米の美術調査に出発する時のものであるが、三、四句はもちろんのこと、全体にみなぎる気迫は美術生のそれというよりは、憂国の士のそれと一見、見紛うものがある。天心の詩には文明史家としての鋭い批評精神が全編に流れている。

これらの文人、思想家の中で不思議なのは中江兆民に漢詩が見当たらないことである。パリ留学中（明4・11岩倉一行と渡米、六年四月より約一年間滞仏）に西園寺、光妙寺らと知りあい、又、ロンドン（明6秋）で馬場辰猪と会っている。そういう友人との交流もさることながら、その抜群の漢文力から言って（幸徳秋水「兆民先生」に詳しい）、兆民に渡航時の漢詩が無いというのは頷けない。全集には採られていないが兆民には漢詩は全くないのであろうか。

その他、気付いた点では森有礼に「航魯紀行」（慶応二・八）があるが漢詩はない。内村鑑三、幸徳秋水にも数編の漢詩はあるが渡航時のものではない。又、プロセイン号で漱石と同時に留学した芳賀矢一には乗船より帰国まで十三首の漢詩がある（『芳賀矢一文集』による）。近年の刊行では堀口九萬一著・堀口大学訳の『長城詩抄』（昭50・3　大門出版）がある。長く外交官の任にあった堀口長城の漢詩に子の大学が洒落た口訳詩を付したものであり、『堀口大学全集』四巻（昭57・12　小沢書店）に収められている。

このように見てくれば、幕末から明治にかけて、『海外体験詩集』で採られた以外の多くの渡航者と漢詩の存在が考えられる。これらの人達と作品をより多く視野に入れることで、海外体験の意味づけと、その詩作品の文学的な意味づけとがなされなければならない。そのための基本文献的性格を『海外体験詩集』は負っている。

四　鷗外をとり巻く文学圏

今回、始めて「衛生新誌」に当たってみて「詞藻」欄にかなりの数の、渡独に際して鷗外に贈られた詩歌のあった

ことを知った。その主要なものである十三号（明23・1）掲載分と、十七号（明23・3）の依田学海「送森軍医遊伯林序」については『海外体験詩集』に影印資料として掲載されているが、それらを含めたすべての資料については既に長谷川泉著『続森鷗外論考』（昭42・12　明治書院）に収められている。今、題・詞書と作者名をあげれば次の如くである。

十三号（明23・1・16）　すべて漢詩

贈森医学士	故天山松田蔵雄
送森君鷗外游欧洲	同　人
寄鷗外在独逸	竹南小史
寄森林太郎先生	高野寛一郎
寄森鷗外詞宗	津城宮崎道
題紅葉寄牽舟賢契在独逸国	応渠佐藤元萇
次森鷗外先生過涙門韻	鷗外斎藤勝寿
呈森鷗外先生	同　人
歩斎藤勝寿韻寄森君	孤松佐藤益太郎

十四号（明23・2・2）　すべて和歌

森高湛の外国にゆく餞に	佐藤元萇
森林太郎君みことのりをかゝふりて外国に留学なし給ふと聞て	関澄桂子

森氏のこと国にわたらせ給ふおん馬のはなむけに　西　升子
おなじ心を　長瀬夫人
年の始に　森きみ子
君か位のほらせ給ふをきゝて　おなし人
消息のはしに　佐藤元萇
我宿の君か常に居賜ひし所に優曇華のいてき侍れは　森きみ子

十六号（明23・3・2）　すべて和歌

月のあかき夜森ぬしの独逸にあるを思ひ出て、　佐藤元萇

擬勢語一則（二首）

むかし女ありけりみやこの中とはいへと田舎ちかき千住の里になんすみけるそのせうとは大みことかゝふりてこと国に行てありけりいてたちしよりよとせはかりを経てその月日にはし居してその折を思ひ出て

その母なんきゝ今一とせを過きなはかへり来むといふに　星の家てる子
尺牘のはしに　佐藤元萇
今年は遠近にかへり花も匂へりときゝて　関澄桂子

十七号（明23・3・16）　漢詩

送森軍医遊伯林序　学海依田百川

二十二号（明23・6・2）　漢詩

送鷗外森君之徳国　　鷗外斎藤勝寿

これらの詩歌について長谷川氏は「それらの詩が丹念に保存されていたのも森家の系族の、鷗外に寄せる期待に出たものであろうが、後日、数年前の作品をおのれの自由になる雑誌に、次々に載せているところに、鷗外の性癖を見ることができる」と評するがそれも確かに一面であろう。しかし、これらの詩歌の背景には又、別の側面がなかろうか。

十三、十四、十六、十七、二十二の五号を通して出てくる名前は松田蔵雄(天山)、竹南小史、高野寛一郎、津城宮崎道（津城は号か）、佐藤元萇（応渠）、斎藤勝寿（鷗外）、佐藤益太郎（孤松）、依田学海、関澄桂子、西升子、長瀬夫人、森きみ子、星の家てる子という人々である。これに「航西日記」に評を加えた長瀬時衡（静石）を加えると十四名となる。これだけの人が鷗外渡独に際し、又、滞独中に詩を賦したということは注目に値する。餞別のこれらの詩歌は、当時の教養人の作としては何程のものでもないかも知れないが、ここに、既に渡航前から鷗外をとり巻く文学圏のあったことを想定してもよいのではなかろうか。

中心人物は言うまでもなく依田学海であり、佐藤元萇であった。この二人について鷗外は「徳富蘇峰氏に答ふる書」（明23・6・23　「国民新聞」）で、「寔に文学はわが好む所なれど、明治の初年に依田学海先生に漢文を学び、佐藤応渠先生に詩を学びし外には、師とたのみし人なし」と述べている。「キタ」では予科三年の明治九年に学海のモデルと覚しき文淵先生が登場するが、それが事実と合わないとする神田孝夫氏の指摘がある。[57] 氏は大学の本科時代（明十～十四）を漢詩文愛読時代と規定し、ここから鷗外の漢詩文修業が開始されるとする。その最初の師が友人の伊藤孫一（「キタ」の尾藤裔一）であり、彼の指導は十二年八月（「自紀材料」）、学業を断念して郷里石見に帰るまで続いた

とみる。そしてこの伊藤に代って登場するのが、学海であり、元萇であったとし、その年を共に十二、三年とする(根拠としては「石見郷友会雑誌」創刊号—明24・2—に載った鷗外の漢詩「詩以代柬復松渓子」を上げる)。しかし、「ヰタ」の記述も一概に虚構と決めつけてしまえない重みがある。一点は「裔一と漢文の作り競をする。それが困じて、是非本当の漢文の先生に就いて遣つて見たいといふことになる」の条。二点は「その頃向島に文淵先生といふ方がをられた。二町程の田圃を隔てて隅田川の土手を望む処に宅を構へてをられる」の条。三点は「度々行くうちに、十六七の島田髷が先生のお給仕をしてゐるのに出くはした。帰つてからお母様に、今日は先生の内の一番大きいお嬢さんを見たと話したら、それはお召使だと仰やつた。お召使といふには特別な意味があつたのである」の条である。まず、第一点であるが、「是非本当の漢文の先生に就いて遣つて見たい」というのは自然の情で説得力がある。この点に関して神田氏は「学海ほどにも名のある大家に漢文を見て貰うには、当人もある程度自信がなければならぬものだが、明治九年現在では、鷗外の漢文を作る力はなお充分とは思われず、自分でも自信があったとは考えられぬ」と言われるが、林太郎と学海との間には特殊な関係があったと見るべきである。それは森銑三氏が引用する無窮会文庫蔵「学海日録」の明治十五年一月七日の項に、「森林太郎来る。近頃陸軍々医副に任ぜらる。年まだ十七八に過ぎず。才子の聞あり。余が墨水にありしとき、その父静男の治療を受けたりし縁をもて、文章など刪潤せし事ありき」[58]とあるによって知られる。まず父静男と学海の縁があって、それに本当の漢文の師に就きたいという林太郎の希望が重なり、「僕はお父様に頼んで貰つて、文淵先生の内へ漢文を直して貰ひに行くことにした」となるのである。ここには特に「大家に漢文を見て貰」おうという気負いはない。その教授法は「ヰタ」に「先生は『どれ』と云つて受け取る。朱筆を把る。片端から句読を切る。句読を切りながら直して行く。読んでしまふのと直してしまふのと同時である」とある如く、少年を扱う如く気さくである。その洒脱で淡白な人柄は「詩以代柬復松渓子」にもよく出ている。又、学海は塾を開いて弟子を取るということはしなかった[59]。従って、明治九年、数え十五歳の少年がその門に出入りしても不思議

ではないのである。又、先程の日記の引用で注目すべきは、林太郎の年齢を三、四歳若く見積っていることである。年より若く見えたのかも知れないが、これは此の度、今井源衛氏によって発見された『依田学海墨水別墅雑録』の明治十七年一月六日の項についても言える。「偶ま森林太郎来訪して云はく（略）。此林太陸軍医為り、幻時余に従ひ文章を学ぶ。歳時往来絶えず、篤実嘉すべき也[60]」の「幼時余に従ひ文章を学ぶ」の部分である。この「幼時」も明治九年のこととすれば、十五歳より、三、四歳若い、十一、二歳となって旨く照応する。もっとも「後光明天皇論」（明24・3・23「国民之友」一一三号）の端書きで鷗外は「左の一篇は明治六七年の頃作りしものにて、（略）。当時これを依田学海先生に寄せて政を乞ひしに」と言っているので、額面通り受け取れば「幼少」は文字通り、幼少とも取れるが、これは諸般の事情で少々、無理のようである。それが第二点以下と関わる。

第二点の「二町程の田圃を隔てて隅田川の土手を望む処に宅を構へて」居たという記述であるが、学海が日本橋北島町の家を引き払い向島須崎村に自邸を構えるのは明治八年の四月である[61]。従って、鷗外が始めてここを訪うのはこれ以後のことでなければならない。この時、林太郎一家が住んでいたのは学海とは目と鼻の先（二町程の田圃を隔て）の向島小梅村二丁目三十八番地であった[62]。のちに一家は明治十二年六月七日に千住に転居するので、向島に居て学海に出入りしたという「キタ」の記述が正しければ、二人の出会いの下限は十二年の前半あたりとなる。しかし、当時の医学校は全寮制であったので、「キタ」の記述の如く夏休みに実家に帰り、そこから学海の下に通ったと見るべきであろう。とすれば、二人の出会いの可能性は八、九、十、十一年の夏休みと言うことになる。しかし、学海の家が八年四月に建てられたとすれば八年の可能性は少いように思われる。八年の夏休みに伊藤孫一と知り合ったという「キタ」の記述が正しければ、当然、九年頃ということになる。ここで登場するのが第三の問題点である「十六七の島田髷」を結った「お召使」である。今井源衛氏の解題ではそれは「明治十年以来婢の身分で仕えている愛妾山崎瑞香」のことであるという。学海より三十一歳下で、明治十年ならば十四歳である。この明治十年以来、仕えていたと

いうのが事実であり、初めて学海宅に伺った時に「お召使」がいたとする「ヰタ」の記述が事実であるならば、二人の出会いは十年の夏以降ということになろうか。しかし、これが確定できない以上、明治九年説を否定する決定的な根拠は見出し難い。あるいは、今井氏は根拠を示されないが、無窮会日記の明治十年に山崎瑞香の名前が出てくるのであろうか。それにしても十四年六月四谷塩町に本宅を移すまで夫人や子供達も居たわけで、十年に来たばかりの少女が特別な意味を持つ「お召使」になるというのも不自然である。二、三年後の関係を繰り上げて述べているのであろうか。今のところ決定打はないが通説に従っておきたい。その根拠は「ヰタ」以外では「後光明天皇論」の前書き、学海日記での若さの強調、両者が共に向島に居た頃等である。

それにしても鷗外の師を遇する態度は特筆に値する。次の佐藤元萇の場合もそうであるが、事あるごとに両者を訪い挨拶を怠らない。「歳時往来絶えず、篤実嘉すべき也」という「墨水別墅雑録」の記事は事実であったようだ。このような関係を保ち得たから、のちの創作合評「雲中語」（二十九年一月創刊の「めざまし草」掲載の「三人冗語」―巻之三より―を九月、巻之八より改題）にも学海が加わることとなったのであろう。鷗外留学に際して学海が贈った「送森軍医遊伯林序」については、「墨水別墅雑録」明治十七年八月九日の条に「森林太郎の為に伯林に遊学するの序を作る。林太頴敏にして沈毅、尋常の年少に同じからず、選択人を得たりと謂ふ可き也」とある。

佐藤元萇については「大日本人名辞書」（大10　経済雑誌社）に「明治維新千住に隠居し十五年茨城県下妻温知病院長に聘せられ後又千葉県野田に遷る三十年八月七日歿す年八十」とあり、医家であり又「詩文集」のあることから詩人であることが知られる。鷗外の千住時代の師となっているので、森家と千住との関わりが問題となる。父静男が南足立郡々医となり千住に借家を借りて診療所（橘井堂医院）を開くのは明治十二年七月である。鷗外が大学を卒業して千住に籍を移すのが十四年八月二十七日（自紀材料）である。しかし、一家が既に十二年六月に移っているので、しばしば実家に帰っていたものと思われる。又、父は明治十年より千住に置かれた区医出張所の管理を託されていた

ので、同じ医師仲間の佐藤とは面識があったものと思われる。そのように考えれば伊藤孫一と別かれた十二年八月頃より交際があったとしても不自然ではない。ただ人名辞書の記述が正しいとした場合、十五年以降のつき合いはないわけで、両者の関係も三年に充たないということになる。これを裏付けるのが「北游日乗」の冒頭である。明治十五年二月十三日、徴兵検査のため北越に赴く時、佐藤応渠より詩歌を一首ずつ贈られるが、その歌に、

心こそ離れざりけれ旅衣ひたちこしぢとたち別るとも

とあり、これに鷗外は「師の君は常陸へゆき玉ふべき頃なりけれは然か云はれしなりけり」と注している。留学以前にこの師弟の別れがあったのである。「大日本人名辞書」の記述が正しければ、この年応渠は六十五歳である。

さて、この応渠先生について鷗外は「訪応渠先生千住居」「呈応渠先生」「書感」「訪応渠先生居。偶作」（共に明治二十四年五月「衛生療病志」第十七号）の漢詩四作を作り、その人となりを称えている。もっとも、人柄については殆ど同時期の作と思われる「詩以代柬復松渓子」に、文の学海と対比させて明快に述べられていた。即ち、「詩格匹陶韋　不屑競麗縟　青雲笑官途　白頭閲世局　興到酌濁醪　高歌撼坤軸……　高風不可攀　余裕何綽々」（陶韋とは陶淵明と韋応物のこと）と。どう見ても清逸の隠士の面影である。詩格が陶韋に匹敵するというのもそのことと関係があろう。あるいは鷗外はたまたま知り得た学海、応渠の生き方に将来の理想を見ていたのかも知れない。

先の四詩で注意すべきは、前後関係から見て、はじめの三詩が明治十三年に作られ、最後の作が十五年二月の作であるということである。この点を重視すれば二人の出会いは十三年で別れは十五年二月ということになろうか。「訪応渠先生千住居」で問題は最後の二句（尾聯）である。「幸得凡身登碧舘　遭僊翁又遇仙郎」とあるが、「僊翁（仙翁）に遭い、又、仙郎に遇う」とある以上、これは応渠先生とその義子斎藤勝寿（元萇に再嫁した夫人の連れ子）のことであろう。苦木氏の年譜では十年の条に「のちに交際した斎藤勝寿」とあるが、この十三年の時点で佐藤家に入っていたと見るべきではなかろうか。というのは、応渠先生の先妻の子に騫次郎がいたが、彼の名は鷗外の文に見当たら

ず、「桂林一枝」三十六号（明13・7）に載った斎藤勝寿の「泛品海」には「佐藤応渠曰。合作」とあり、十三年の時点で両者は同居していたと思われるからである。（この項、茂吉の「鷗外の号に就いて（三たび）」参照）又、苦木年譜では「斎藤勝寿は、明治十五年頃（推定）から、朝、昼、晩と森家に出入りし、寝泊りすることもあった。これは、応渠の内証が苦しいので、学資の助けになればと林太郎が言い出して、隔晩妹きみに漢学を教えに来たからである」とあるが、あるいはそういう理由もあったかも知れないが、この年から応渠は茨城県下妻の病院長として赴任しているので、勝寿が千住に残り何かと森家の厄介になっていたと見るべきであろう。[63]「呈応渠先生」「書感」は共に一度会って、たちまち肝胆相照らす仲となり、その快男児ぶりを称え（杏林未遇一奇男）、これを当年の「独嘯庵」（山脇東洋先生の目の前で井戸茶碗を砕いてその度量を試した永富鳳の号）に譬えた詩である。最後のものは「北游日乗」の旅に出かける時に詠んだもので、人のよく集まる佐藤家を当年の「桃李蹊」に譬え、その徳を称えたものである。いずれも応渠先生への傾倒ぶりが窺えて、鷗外の絶大な信頼感が読み取れる。その応渠先生が鷗外に贈った詩歌は茨城県下で詠まれたものであろうか。

さて、この二師に先立つ伊藤孫一との交わりであるが、これについては「ヰタ」はじめ、「石見郷友会雑誌」一、二号に載った「詩以代柬復松渓子」と「石見郷友会雑誌第一号を評す」（特にその中の文「伊藤子遂書画帖題言」「別子遂」）に詳しい。伊藤は学を途中で廃し郷里の石見津和野に帰り、母の再嫁した有美氏を名告るが、[64]「衛生療病志」十二号（明23・11・9）に次の詩を寄せていて注目される。（長谷川泉『続森鷗外論考』より引用）

寄鷗外詞兄　原二首　　有美孫

欽君功大又名隆　一旦決謀還海東　夜月孤舟一天水　暁霜匹馬千里風

五瀛洲静徐々転　双眼界明歴々通　奇境奇詩在嚢裡　拆来千丈見長虹

帰国後、鷗外より有美宛書簡（明22・10・12か）があり、有美が訳詩集『於母影』に注目していたことが分かる。これは「舞姫」や「うたかたの記」が出てからのものであろうか。日本に帰ってからの活躍を欣び、暁に千里を駆ける匹馬の気概を寿ぎ、異境に作られた詩がこれから発表されて、きらびやかな虹を千丈の天に架けることを期待したものであろう。「別子遂」に曰く。「殊不知雁魚往復品詩評文。與子遂既有其約也」と。ここで、別れて十一年、有美孫一は「詩を品し文を評す」とした「其約」を果たしたのであろうか。

先に佐藤応渠のところでも触れたが、その義子斎藤勝寿は「鷗外」の号を有している。「衛生新誌」でもこの号を使用しているが、勝寿はこれを「かもめの渡しの外＝千住」の意で使用しているが、他に「吉原」の意もあったらしい。森林太郎はこれらを踏まえ、鷗外に歐外を掛け「歐州に在ってその風に染まらぬ」意を込めて[65]、帰国後、斎藤勝寿に了解を取って公に使用したようである。その斎藤勝寿の「送鷗外森君之徳国」が二十二号に載ったのは、それが鷗外の手元に見つからなかったことによるものであろうが、十三号掲載の二詩は共に鷗外帰国後の作である。「次森鷗外先生過涙門韻」の方は言うまでもなく「還東日乗」明治二十一年八月九日の条で、紅海からインド洋に入る「涙門」（バブエルマンデブ海峡）を通過した時に詠んだ鷗外の詩に次韻したものである。鷗外の詩は一、二、四句の「根」「恩」「門」が韻を踏むが、勝寿はその漢字をそのまま踏襲している。これは九日の条で石黒忠悳が次韻しているのをまねたものであろう。ただ、勝寿は涙門が小龍門に過ぎないことを強調し、学海の荒浪を乗り超え帝恩に報いることを期待しているが、鷗外が涙門を過ぎた時に感じた複雑な悔恨の情には思い至っていない。さて、「還東日乗（其二）」が「衛生新誌」二十二号に載るのは二十三年六月である。十三号（明23・1）の時点では未だ活字になっていないのであり、勝寿は鷗外より直接、「還東日乗」を見せてもらっていたのであろう。活字になる前に「航西日記」や「還東日

乗」は仲間うちで回覧されていたのであろう。津城宮崎道の「寄森鷗外詞宗」に「対月空吟十客歌」とあるが、これは二号（明22・4）に発表された「航西日記」の「日東十客歌」を指すのであろう。

「航西日記」の評者、長瀬時衡（静石）についてはよく分からない。「日本人名事典」（平凡社）で拾う限りでは一八三六年備前の生まれ、幕末から明治中期（一九〇一年没）の医家、一等軍医正。征台の役、佐賀の乱、西南役に軍医として出征し、十八年広島鎮台軍医長、二十一年第五師団軍医長、二十四年陸軍省第一課長心得となり、「航西日記」が発表された二十二年四月には第五師団軍医長ということになる。これでは接触の機会もないようであるが、鷗外が帰国した二十一年九月から二十二年の初めにかけて、二人の接触がなければ「航西日記」の評は有りえない。帰国後、鷗外は陸軍軍医学校の教官であったからそのつながりであろうか。あるいは、「衛生新誌」十四号に留学の餞として長瀬夫人が歌を贈っているので、長瀬家とのつき合いは留学以前からあったということになろうか。夫人の歌のグループからか、あるいは軍医関係で知り合ったのであろうか。鷗外より二十六も上の先輩である。鷗外はよくよく年長者から目を掛けられたということであろうか。

残る和歌グループの方であるが、関澄桂子は小金井喜美子の『森鷗外の系族』にも出てくる喜美子の和歌の師匠である。千住の北組に住み、本名は泰子、明治十五、六年当時、二十五、六であったと言う。彼女の縁で橘東也子と知るが、のち福羽美静（津和野藩出の国学者、歌人）に和歌を習ったという。鷗外も伊藤孫一の母貞子の実弟である加部厳夫に和歌の添削を請うたという。福羽、加部ともに桂園派の歌人であった。西升子は西周の夫人である。長瀬夫人と言い、西升子と言い、ここでも年長の夫人達が若き鷗外を見守っている。漢詩文のグループと違った和歌のグループが鷗外の回りに存在したことに留意すべきではなかろうか。

このように見てくると留学以前に鷗外をとり巻く文学圏（文学的雰囲気と言ってもいいが）の存在したことが知られる。伊藤孫一、依田学海、佐藤元萇、斎藤勝寿、長瀬時衡らを中心とした漢詩文の世界と、妹喜美子につながる和

歌文学の世界とである。留学以前にこの和漢の世界に充分、親しんだことが後の鷗外文学の開花につながって行くのは言うまでもない。「於面影」やドイツ三部作は留学だけによって得られたものではなかった。その底には鷗外のゆるぎない和漢の教養があったと見るべきであろう。そして、学海、元萇の二人が持っていた清逸の趣は青年林太郎の底に深く沈澱し、時にその意味を反芻させるがごとき痕跡を残したことを記憶に止めるべきであろう。

「於母影」「舞姫」を中心とする鷗外文学の出発期を考える場合、我々はくり返し、漢文脈、和文脈という表現の問題に立ち返って行かねばならないことを確認しなければならない。

注

(1) ドナルド・キーン『統百代の過客』上・下（昭63・1、2　朝日新聞社刊　昭61・10・13～62・10・29「朝日新聞」連載）はその観点から近代日本人の日記を見直した先駆的な仕事である。ことに上巻に収められた多くの渡航者の日記がこの論考と時代的に重なる。

(2) 『ことばの重み』（昭59・1　新潮選書）。なお、前田愛『成島柳北』（昭51・6　朝日新聞社）には既に、「航西日記」を書くにあたって鷗外が「航西日乗」を参看したことが指摘されている（六　パリの柳北）。

(3) 両者の違いを例えば明治五年九月二十一日（香港）の条で見てみる。

（航海日記）

過二英華書院一、買二新旧約書一。観二種字句一途上撞二着一大字一。掲二示昇平戯園四字一者乃劇場也。投二二元一而観焉。壮麗可レ見也。蓋音調極二高峭一。

（航西日乗　「明治文学全集」による）

英華書院ニ過ギ書籍ヲ購ヒ種字局ヲ観ル途上一劇場有リ昇平戯園ト掲題ス入テ観ルニ頗ル荘厳ナリ其音吐ハ頗ル峭急ニシテ……

「航西日記」では「買二新旧約書一」とあるものが、「航西日乗」ではただの書籍になっている。新旧約書とは漢訳聖書のことと思われるが、これを単なる「書籍」としたところに柳北の改稿における趣味が現われている。

(4) 太陽暦が採用され、明治五年十二月三日が明治六年一月一日となるが、柳北らはヨーロッパ到着後、すぐ太陽暦に合わせて日時に留意している。これはパリ到着後の十一月二十一日に大使館より川路寛堂が来て「本邦暦法改革ノ事」を知らせたためである。幸いに十一月

一日が西洋暦の十二月一日に相当するので、読み替えに不自由せず約一カ月早くパリで新年を迎えた。

(5) 新暦で行くと柳北が出発した九月十三日は十月十四日となり、鷗外が出発した八月二十四日とはおよそ二カ月近くの差がある。「キタ・セクスアリス」の「十四になった」条と「雁」の「壱」に出てくるが、既に神田孝夫「若き鷗外と漢詩文　上」（「比較文学研究」13号　昭42・11）に指摘がある通り、十四歳を明治八年とすると「花月新誌」（明10・1創刊）は未だ刊行されておらず、明治七年に出版された「柳橋新誌」二編・初編を指すと考えた方が妥当であろう。

(6) 「青一髪」の典拠については『ことばの重み』に詳しい。

(7) 「快言フ可カラズ」については鷗外も八月二十八日の条で「舟行甚穏。終日臥艙板上。布蓋遮日。竹床支体。快不可言」と使用している。

(8) 王韜のことか。「中国人名大辞典」（一九二一・六　商務印書館、一九三〇年七版）より掲げる。清洲人。字紫詮。号仲弢。晩号天南遯叟。官粤省。以偏袒太平軍去職。遠適重洋。同治間帰自泰西。主講上海格致書院。能詩。工駢文。有弢園文集。普法戦紀。瀛壖雑詩。淞隠漫録。甕牖余談。

香港についての該当記事は「普法戦紀」を除いて、「弢園文集」以下の書のいずれかに収録されているのかも知れないが、「百部叢書」「四庫全書」いずれにも未収であり確認できなかった。

(9) 岩波文庫の注解では「ホンコン」＝ポルトガル語説を「編者の錯誤だろう」として、ホンコンが「香港」の広東方言語音である旨を記している。ポルトガル語で盗賊はLadrão、海賊はPirataであり、この語源説が誤りであることは明白である。

なお、なぜこのような誤解が生じたかについては次の「大百科辞典」（昭60・6　平凡社）「香港」の項が明らかにしてくれている。香港の名は当時、越人により九竜で香木が栽培されており、その積立港が現在の香港仔であったことから、移住した漢人により香港とよばれるようになったという。香港島は海賊にとって絶好の根拠地の一つで香港仔と筲箕湾（しょうき）の二カ所は元代には海賊の巣窟として中央政府には知られていた。

鷗外は「海賊」を「盗賊」と書き替えてはいるが、この部分をそっくり「実記」から失敬しており、更に念を押すためにペダンチックに王紫詮などを引用しているのであろう。

(10) 「斌媚」と「適美」が対応する。「斌」は文・質がよく調和してりっぱな形容。「適美」は強く美しいこと。なお、「坊門」は市中に設けた門、町の門の意であるが、「実記」の「皆筆法斌媚」や「坊間ノ俗書」と考え合わせると、「坊門」ではなく「坊間」（まちの中、市中）の方が適切なように思われる。初出の「衛生新誌」では「坊門」である。

(11) 交趾の地名起源説に対して香港の時のように鷗外は「実記」の説に拠っていない。「安南紀遊」（清・潘鼎珪　百部叢書所収）の該当部には「其俗男女披髪両足大趾交曲相向故取名交趾」とあり、鷗外がこの書を横にしていたのは明らかである。なお、「安南雑記」（清・李

仙根　百部叢書）には「交阯之地即安南即交州即日南西北自交岡来故曰交阯」とあり、地名起源説の一筋縄ではいかないことを物語っている。

(12)「尼泊爾弗樹」は「尼泊爾」が「輿地誌略」では「ニッポール」（ネパール）となっており、「弗樹」が「佛樹」（菩提樹）ならば「ネパール菩提樹」のことかと思われたが（「日本国語大辞典」には「天竺菩提樹」があがっている）、十月二日の条に「『尼泊爾弗』樹」とあるので、「尼泊爾弗」で「ネパール」と読ませるのであろう。ネパールにこの四字を宛てたものは珍しい。なお、「牽牛花」はアサガオ、「芭蕉」はバナナのことである。

(13)「劉穆之金柈」の出典は「南史」巻十五列伝第五「劉穆之」である。貧乏していた穆之には檳榔の実のことで妻の実家で苦い思い出があったが（消化を促進するというので食後、それを所望したが、常に飢えている人には必要なかろうと妻の兄弟たちに辱しめられる）、自分が任官した時、そのことを根に持たず、金柈（金盤）に貯えておいた一斛（十斗）の檳榔の実を招待した妻の兄弟たちに饗したという。この故事から言えば、貯えておいてめでたい時に食べるというのではなくて、毎日食するので歯が黒ずむということになろうか。それにしても、檳榔からすぐに劉穆之を想到するというその博識に驚嘆せざるを得ない。あるいは当時の教養人にとって常識であったものが、今の我々にはそうでなくなっているというだけのことか。

(14)「日乗」のこの前後をもう少し引用すれば、「四時塞昆ニ達ス是レ安南ノ都邑ニシテ近年仏国ノ所領トナレリ人種ハ支那ニ類ス男女其歯皆黒シ椰子ヲ食フニ因ルカ屋舎ノ甍瓦皆赤色ナリ始テ椰樹林ヲ見ル」ということになるが、「白華航海日記」第一種が柳北の原文だとすればこの箇所は次のように対応する。

　達二柴昆一。楼閣頗壮。瓦皆赤色。始見二椰樹一。土人皆畜レ髪、人種与二支那一同。男女歯皆黒、而多赤脚。

言うまでもなく漢文体が簡潔で書き下し文は引き延ばされている。漢文体では歯の黒い理由が示されていないが、書き下し体では示されている。椰子と檳榔では異るが、「花月新誌」掲載にあたり「実記」が参看されたのであろうか。もっとも「輿地誌略」、「暹羅」の項に「檳榔ノ実ヲ嚙ムニ因リ口唇皆赤黒ニシテ」とあるので、「実記」ばかりを想定できないが。

(15)サイゴンでの「日乗」との類似については前田氏の前出書に指摘がある。

(16)「嶺南雑記」上巻（清・呉震方　百部叢書）「蛋戸」の項には「数入水不没毎為客泅取遺物」と鷗外の引用文そのままの箇所がある。「航西日記」にはこの書からの引用が随所に見られることを小島憲之氏は指摘している。

(17)水中に潜って銀貨を拾うこの景はシンガポールの子供達の風物詩であり、漱石も明治三十三年九月二十五日の日記に書き留めている。同じ景は十月十五日のアデンの条でも見られる。

(18)「日記」はコロンボであるが、「実記」「日乗」では共にポイント・デ・ゴール（今日のガル。当時、一般にゴールと呼ばれていた）の景である。両都は距離的にかなり離れているが、「日記」の叙述が奇妙に「実記」「日乗」と対応している。やはり、鷗外が大幅に両書の

記述を取り入れたものか。

(19) 「白華航海日記」では、この部分は「以二港口浪不一レ平作二奇舟一載レ客。舟挾小長二丈余、横尺余」となっている。このあたりを見ると柳北も「実記」を参照しているように思える。

(20) 両者の傍線部が対応していると思われるが「呉子」にはこれに相当する所がない。「谷戦」「谷戦之法」が出てくるが牛羊を利用するというものではない。あるいは「孫子」「六韜」かと思い調べてみたが該当する所はなかった。

(21) それぞれ(a)と(á)、(b)と(b́)が対応しているという意味の傍線である。なお、「印度者月国」の出典は「日記」にあるように、「大唐西域記」巻二の「印度者唐言月」による。

(22) 「輿地誌略」でも亜丁は「欧州ヨリ東洋ニ往来スル飛脚船ノ碇泊場ニシテ紅海咽喉ノ地ナリ」とあり、慣用的用法と思われる。

(23) 「赤野」の語に注目されたのは小島氏であり、氏の指摘の如く九十五巻「紅海航程ノ記」に頻出するが、この語が実記ではじめて出てくるのは九十四巻「地中海航程ノ記」のようである。「亜剌比亜地方赤野ノ余脈、此ニ至リテ纔ニ生気ヲ帯フト謂テ可ナリ」とある。なお、「実記」との対比で小島氏は特にこのアデンとコロンボの条を重視している。

(24) この「赤地」が実記からの借り物でないことは「白華航海日記」の原文「両岸赤地、千里不レ見二一草一」で明らかである。

(25) 「白華航海日記」では「洞然」(がらんどうの様子)になっている。

(26) 岩波文庫の校注では水位差十メートル説、平凡社「世界大百科事典」では九・九メートル説を採る。

(27) 「白華航海日記」ではそれぞれ、「底武坐」「伊斯麻利亜」「馬羅亜」「緬坐列」となっている。

(28) 恐らく鷗外はこの「実記」の記述を基にガリバルディの詩を詠んでいると思われるが、岩波文庫の注にある通り、史実は本人ではなく配下の志願兵、若干名を北軍に派遣したのである。

(29) この詩の直前に「瓦斯燈夜ヲ照シ白昼ニ異ナラズ真ニ安楽国ナリ」の記述が見える。鷗外もこの瓦斯燈に目を瞠った。

(30) ここは「オデオン座であろうか」とされた小堀桂一郎氏の説に従いたい(『若き日の森鷗外』)。

(31) 渋沢の「航西日記」は慶応三年一月十一日より始まり同十一月廿一日で終っているが、『渋沢栄一伝記資料』(昭30・4 刊行会)によれば、「航西日記」の表題の下にカッコで渋沢栄一・杉浦愛蔵共著とくくられ、明治四年から六年の整理期日と思われるものが記入されている。この杉浦愛蔵については幸田成友「杉浦愛蔵外伝」(『史話東と西』昭15・1 中公社)に次の如き記述がある。

杉浦愛蔵は甲府勤番同心杉浦七郎右衛門の長男で、名を良譲また単に譲といひ、靄山と号した。文武の材に勝れたため外国奉行の下役に擢んでられ、文久三年及び慶応三年両度まで仏国に渡航した人である。幕府瓦解後一時駿府に逼塞したが、二度目の洋行の際に知己となった渋沢篤太夫後の栄一子爵と相前後して明治政府に徴され、公務の余暇両人で航西日記六冊を出版した。不幸にして愛蔵は四十歳そこそこで歿したため、事業は多く残らないが、駅逓権頭前島密洋行中、逓信制度を創始したは実に彼の功である。

(32) 名村元度の「亜行日記」（万延元年）の香港の条に見える「療病船三隻アリ」の療病船のことであろう。又、香港の条で一つ不可解なことは、大抵の渡航者が必ず英華書院に立寄って漢籍や辞書、漢訳書の類を購っているのに、鷗外にはその記述がないことである。これは病院視察のためその暇がなかったことに因るか。

(33) 鷗外は軍の衛生制度には熱心であったが、アジア各地の人民の衛生については意外と無関心であった。「実記」の「支那人種ノ不潔ヲ厭ハサルハ、怪ムヘキホドナリ」（明6・8・22 サイゴン）や、「日乗」の「支那人ノ不潔ナル概ネ此類ナリ」（明5・9・21 香港 食事をした楼の屋上に厠があった）と二人が注記していることにも、一向、平気であったものか。「日東十客歌」の「鼾息若雷誰敢呵」という豪放な性格であったのであろうか。

(34) 小西謙「若き鷗外関心の人間像―林紀について述べ鷗外陸軍入りの実情に及ぶ―」（「学習院女子短大紀要Ⅳ」昭42・2 『日本文学研究資料叢書・森鷗外』所収）。長谷川泉『「キタ・セクスアリス」考』（昭43・7 明治書院）。他に『大人名事典』（昭28・12 平凡社）に掲載。

(35) 林は長崎とオランダで共にポムペの指導を受けているので、明治初期の陸軍医事がオランダと密接な関係にあったことは予想できる。

(36) 「衛生新誌」「鷗外全集」共に島邨千雄とするが「大人名事典」三（昭28・12）所収の島村干雄（たて）（一八五六～一九一〇）のことか。日記に土佐人とあるが当該項目でも土佐の人となっており、明治七年の佐賀の乱、台湾征伐に従軍し日清凱旋後第三師団参謀長となり、日露戦役では第十二師団参謀長として武勲を樹てた。陸軍少将。同郷の先輩谷干城を頼り兵士となる。又、明治十年に陸軍少尉に任ぜられているから、明治十七年に中尉というのは可能性としても自然である。

(37) ここをはじめ、鄭成功の記述は石原道博『国姓爺』（昭34・4 吉川弘文館）による。

(38) 清沢洌『外交家としての大久保利通』（昭17・5 中公社）によって、大よその経緯と戦況はつかめる。この戦役には米国もからんでいたようであるが、七年五月二十二日、西郷都督は社寮港に着き（台南南端、琉球人の漂着も南端に近い東岸の八瑶湾である）、牡丹社を三方より攻め六月二日にはほゞ平定する。出征人数三六五八名の内、戦死者は十二名にすぎないが、病死者が五六一名も出た。これは、雨期・霖雨・暑熱が重なり九月に入ると全員、罹病しマラリア・腸チフスの類に罹ったためである。

他に「大百科事典」（平凡社）の「台湾出兵」の項を参照。「明治ニュース事典」1（昭58・1 毎日コミュニケーションズ）にも事件の経緯は詳しい。

(39) 「明治ニュース事典」の新聞報道では牡丹人（ボーダン）、牡丹社、牡丹地の呼称が頻出するが、これは高砂族の中の一種である。

(40) 越智治雄「『浮城物語』とその周囲」（『近代文学成立期の研究』所収 昭59・6 岩波）参照。

(41) 柳田泉「『浮城物語』について」（昭15・11 岩波文庫解説）による。

(42) 初出の「衛生新誌」では「洋紀無遺」となっているが、これでは意味をなさず、ここは小島氏が指摘するように「詳紀」の誤植だと思

われる。なお、訓みは小島氏のそれを参照した。

(43) 恐らく「写真作家伝叢書」の方が正しいと思われるが、『東京帝国大学一覧』では若干、順位、人数が異る。それによれば一位から十二位までは文部省公報と同じであるが、十四位から二十八位までは必ずしも一致しない。又、二名増の三十名卒業になっている。

(44) 神田孝夫「若き鷗外と漢詩文　上」（「比較文学研究」13号　昭42・11）

(45) 「書評『ことばの重み』」（「比較文学研究」46号　昭59・9）

(46) これは大学南校、文部省、修静館と受け継がれた官版の編輯者であるが、石川県図十一冊本では十巻（明10・5　富修館）の纂輯者が岩崎直邦、十一巻（明10・5　同）が岩崎直邦、鈴木重遠の纂輯となっている。十巻は「亜米利加洲之部」上巻一であり、十一巻は同上巻二である。

(47) 述べる機会を逸したが、「輿地誌略」は「西洋事情」「西国立志篇」と並び明治の三書と称され、青年に大きな影響を与えたという（「教育人物事典」上　昭59・4　ぎょうせい）。漱石は小学時代、成績優秀で「勧善訓蒙だの輿地誌略だのを」貰ったという（「道草」三十一）。又、鷗外の「かのやうに」には「西洋事情や輿地誌略の盛んに行はれてゐる時代に人となつて」という記述がある。集英社版漱石全集の注解者も先の三書を「明治初期三大出版物」としているが、諭吉の場合、「学問のすゝめ」でなく「西洋事情」であるのが少し気になる。

(48) 国名、地名を上げて漢字を宛てたものには森島中良『蛮語箋』（寛政十）がある。

(49) この「地球説略」はよく利用されたと見え、森田清行「亜行日記」（万延元）に、この書の国名、地名の表記がメモ風に多く書きとめられている。清国版の原本は金沢市立図書館に架蔵。

(50) 「自紀材料」には明治三年十一月（九歳）「是月父に和蘭文典を学ぶ」、四年（十歳）「夏室良悦に和蘭文典を学ぶ」とある。又、「サフラン」には「父は所謂蘭医である。オランダ語を教へて遣らうと云はれるので、早くから少しづつ習つた」とあり、その時の蘭和字書には「音訳に漢字が当て嵌めて」あり、その中に「泊夫藍（サフラン）」のあったことを印象深く書き留めている。『蘭語訳撰』（文化七）あたりがそれに当たるか。なお、長谷川泉『続森鷗外論考』（昭42・12　明治書院）のグラビア写真には津和野藩校養老館で用いられた蘭学の教科書「和蘭文典　後編　成句論」（嘉永元・九）が載っている。

(51) 「輿地誌略」では他に「エルバ島」に「易北」を宛てている。これはエルベからの類推でそうなったのであろうか。

(52) 「日本文学における漢語的表現V—誤読を中心として—」（「文学」昭60・5）。『日本文学における漢語表現』（昭63・8　岩波）に所収。

(53) 加賀の人横井璨纂輯の『薬名早引』（天保七・一二　二冊　金大薬学図）では、「サントリー・セム」の訳名として「駆虫子」をあて、「サントリ」の代用例として日本名「野艾蒿（がい）」「當薬」をあてている。

他に宇田川榛斎訳述・宇田川榕庵校補『新訂増補和蘭薬鏡』六冊（文政十三）にも「珊篤里」はよく出てくるが、「珊篤尼」は出てこない。

(54) この高橋義雄とは「還東日乗」、明治二十一年七月八日（ロンドン）の条にある「高橋義雄先在。義雄嘗著拝金宗。行於世。」と同一の人物と思われる。

(55) 木戸孝允には明治元年四月から同十年五月までの詳細な「木戸孝允日記」三冊（昭7）があるが、渡米欧中の漢詩は載っていないようである。

(56) 三好行雄「『妄想』の地底―漢文体の世界―」（「文学」昭50・2）では次の詩が引用されている（明21・7）。

天涯地角托浮生　孤剣蕭條無限情　回首家山幾千里　鉄車衝雨入英京

(57) (44)に同じ。

(58) 森銑三『明治人物夜話』（昭44・9　東京美術）による。

(59) (58)に同じ。

(60) 原文漢文。今井氏の訓みに従う。今井氏の「解題」に詳しいが、学海はほゞ同時期に無窮会本の十八冊（全四十四冊の内）の日記と韓国本の五冊（六冊ある内、一冊目欠）の日記を併行して書いていた。前者は神田小川町の本宅で書かれた日常的な和文体、後者は向島の別宅で書かれた漢文体である。

(61) 今井氏の解題に従う。『近代文学研究叢書10』（昭33・10　昭女大）の記述と若干、異る。関良一氏の「依田学海の日記」（「国文学」昭39・8）では明治八年四月二十八日、須崎村に転居、同地に新居を構えたのは同年九月十日、同地から四谷塩町に転じたのは同十四年六月二十一日とある。氏の小文は「学海日録」紹介の基本文献である。

(62) 年譜は苦木虎雄氏の現在も進行中の労作「鷗外研究年表」に拠る。

(63) 斎藤勝寿に「森博士の片影」（「新小説臨時増刊・文豪鷗外森林太郎」大11・8　『国語国文学研究史大成14』所収）なる文章があるが、応渠先生を含めてつき合いの期間が明確ではない。十四、五年に記憶が集中しているようである。

(64) 有美孫（ありよしゆずる）については岩町功「有美孫（伊藤孫一）小伝」（「鷗外」42　昭63・1）に詳しい。

(65) 『鷗外印譜』（昭63・6　森鷗外記念会）の解説による。筆者は長谷川泉氏か。なお、雅号についてはこの通説に反論する茂吉の説があり（「鷗外の号に就いて」全六回、『斎藤茂吉全集』第十二巻　昭27・12）、これを支持する小堀桂一郎氏の解説（『鷗外選集』第二十一巻）がある。

(追) 「朝日新聞」（平1・1・23）の紹介記事によれば「夜電」部劇場はエデン劇場と訓ませるらしい。詳しくは「明治文学全集・総索引」の刊行を待ちたい。

付記

本稿は昭和六十一年度の大学院の演習で取り上げた「航西日記」を私なりにまとめたものである。不明の部分も多かったが演習者達がいいヒントを与えてくれた。未知の部分が少し開かれたような気がする。演習者に感謝すると共に質問に根気よく答えてくださった中文研究室の望月真澄氏に感謝申し上げる。